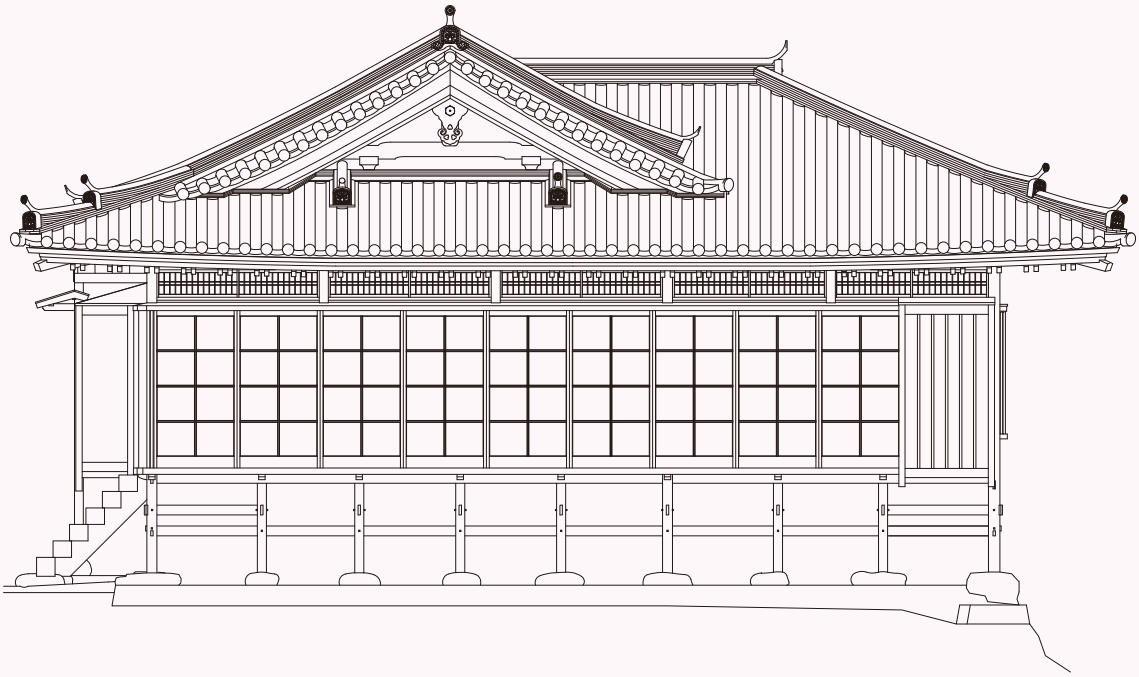
公益財団法人

和歌山県文化財センター年報

埋蔵文化財発掘調査と文化財建造物保存修理の記録

2013



1　平井遺跡　埴輪窯（南西から）

2　平井遺跡　２号埴輪窯　床面２（南西から）

3　小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡　調査区１全景（南から）

4　小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡　003 建物（北から）

5　東照宮　唐門・東西瑞垣　竣工

6　熊野本宮大社　鈴門・瑞垣　竣工

7　丹生都比売神社　本殿　修理中

8　琴ノ浦温山荘　浜座敷　修理中

目　次

平成 25（2013）年度　受託業務一覧 …… 2
平成 25（2013）年度　受託業務所在地図 …… 3

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物整理

平井遺跡及び平井Ⅱ遺跡（第 3 次）の発掘調査　… 4
平井遺跡（第 2 次）・平井Ⅱ遺跡（第 4 次）の発掘調査 … 6
山口古墳群の発掘調査…… 7
和歌山城跡の発掘調査…… 8
和田遺跡の第 2 次発掘調査　……10
根来寺遺跡の発掘調査……11
小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡の発掘調査……12
東渋田遺跡の発掘調査……14
神前遺跡の第 2 次出土遺物等整理　……15
井辺遺跡及び神前遺跡の第 2 次出土遺物等整理　…16
六十谷遺跡の出土遺物等整理……17
立野遺跡の出土遺物等整理……17
近畿自動車道紀勢線事業に伴う第 1 次の出土遺物等整理 …18

文化財建造物の保存修理技術指導

重要文化財 丹生都比売神社本殿の保存修理　……19
重要文化財 琴ノ浦温山荘浜座敷ほか 2 棟の保存修理…20
重要文化財 東照宮唐門ほか 3 棟の保存修理　……21
重要文化財 旧西村家住宅の保存活用計画　……22
重要文化財 慈尊院弥勒堂の保存修理　……22
国史跡 熊野三山史跡等保存整備
　～熊野本宮大社神門ほか 4 棟の保存修理～　……23
国史跡 丹生都比売神社境内史跡等保存整備
　～若宮・玉垣・玉垣鳥居・木柵の保存修理～……24

関連研究・資料紹介

平井遺跡で発見された埴輪窯……25
弥生土器の搬入と臨地生産
ー神前遺跡出土土器の胎土分析成果からー……27
双脚輪状紋形埴輪と胡籙形埴輪の新資料
ー平井遺跡出土例についてー……29
重要文化財丹生都比売神社本殿保存修理工事
　ー塗装工事における新発見ー……30

普及活動

平成 25（2013）年度の普及啓発事業　……32

センター概要

平成 25（2013）年度概要 ……36

巻 頭 写 真

1　平井遺跡　埴輪窯（南西から）
2　平井遺跡　2 号埴輪窯　床面 2（南西から）
3　小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡　調査区 1 全景（南から）
4　小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡　003 建物（北から）
5　東照宮　唐門・東西瑞垣　竣工
6　熊野本宮大社　鈴門・瑞垣　竣工
7　丹生都比売神社　本殿　修理中
8　琴ノ浦温山荘　浜座敷　修理中

例　言

1　本書は、公益財団法人和歌山県文化財センターが平成 25 年度受託業務として行った埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物等整理業務、文化財建造物の保存修理技術指導業務および普及活動の成果をまとめたものである。
2　掲載した地図は、和歌山県教育委員会が発行する『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』2004 ～ 2006 年度（地図は国土地理院発行の数値地図 1：25,000 の複製）および数値地図 1：25,000 の複製を一部加筆し引用した。また、各自治体の発行する 1：2,500 都市計画基図を一部加筆し引用したほか、電子国土（http://cyberjapan.jp）提供図の複製を用いた。
3　掲載写真・図面は、基本的に調査および整理中に撮影・作成したものであり、出典が異なる場合は個別に記した。また、本文中の所見は、調査・整理作業段階のものであり、今後の作業の進展により変更する可能性がある。
4　掲載した座標値は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）による。
5　原稿執筆は職員が分担して行い、文末に執筆者名を記した。編集・組版は、森原かおり・下津健太朗が担当した。

平成 25（2013）年度　公益財団法人和歌山県文化財センター受託業務一覧

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物整理業務

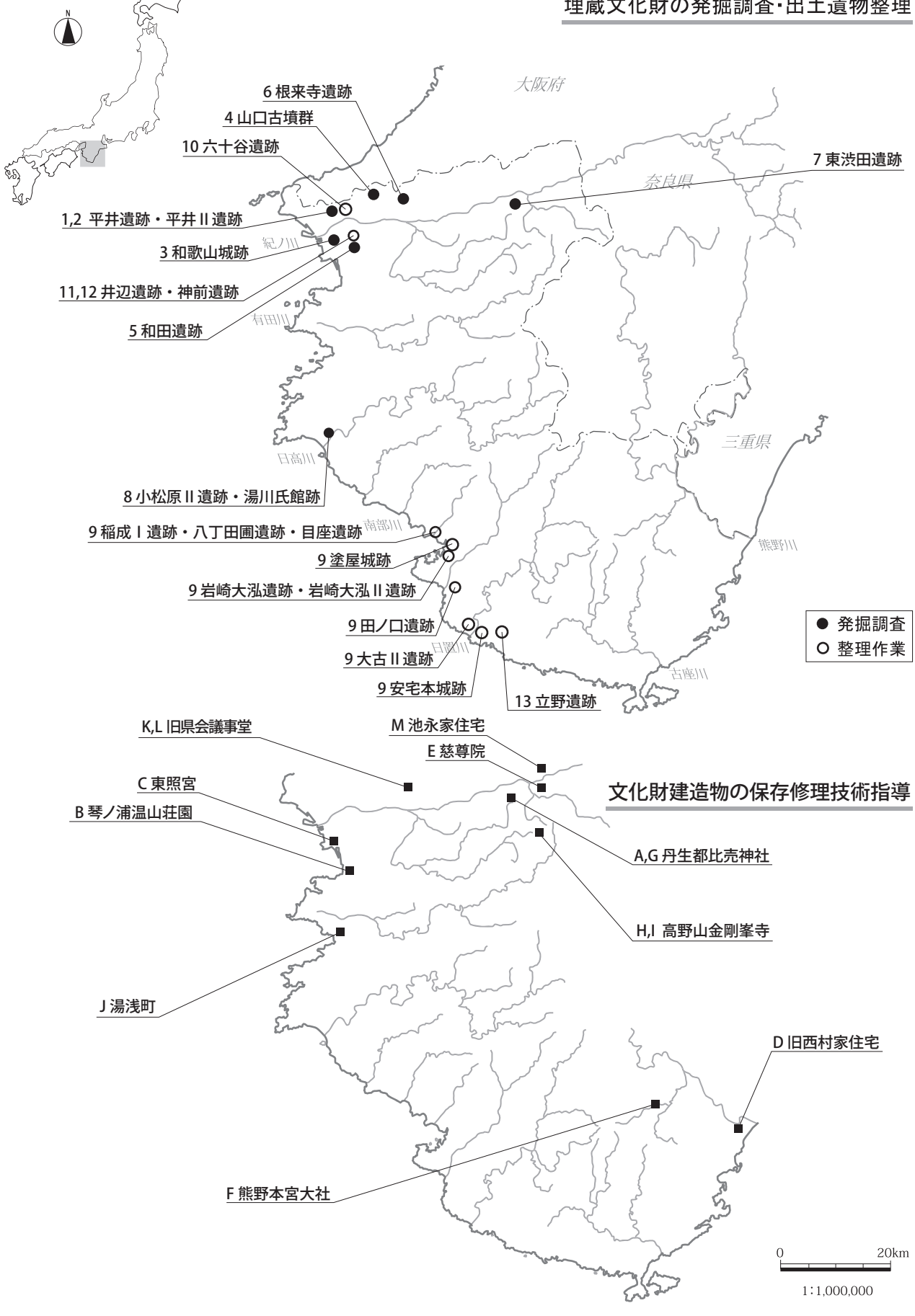
	受託業務の名称	所在地	契約期間	調査面積	委託機関等
1	一般国道 26 号第二阪和国道平井遺跡及び平井Ⅱ遺跡（第３次）発掘調査業務	和歌山市平井	2013.05.28～2014.03.30	10,131㎡	国土交通省（近畿地方整備局）
2	一般国道 26 号第二阪和国道平井遺跡（第２次）発掘調査業務	和歌山市平井	2013.09.10～2014.03.25	2,193㎡	国土交通省（近畿地方整備局）
3	和歌山地方合同庁舎新築に伴う和歌山城跡発掘調査業務	和歌山市二番丁	2013.07.02～2014.03.31	2,824㎡	国土交通省（近畿地方整備局）
4	一般国道 24 号京奈和自動車道山口古墳群発掘調査業務	和歌山市山口	2013.10.08～2014.01.17	660㎡	国土交通省（近畿地方整備局）
5	秋月海南線道路改良工事に伴う和田遺跡第２次発掘調査業務	和歌山市和田	2013.03.11～2013.09.28	4,548㎡	和歌山県
6	一般国道 24 号京奈和自動車道根来寺遺跡（第３次）発掘調査業務	岩出市根来	2013.05.31～2013.08.12	203㎡	国土交通省（近畿地方整備局）
7	和歌山橋本線道路改良工事に伴う東渋田遺跡発掘調査業務	伊都郡かつらぎ町東渋田	2013.05.08～2013.12.10	1,917㎡	和歌山県
8	湯川中学校改築工事に伴う小松原Ⅱ遺跡及び湯川氏館跡発掘調査業務	御坊市湯川町	2013.04.23～2014.03.31	3,787㎡	御坊市
9	近畿自動車道紀勢線事業に伴う第１次出土遺物等整理業務	田辺市秋津町・稲成町・西牟婁郡上富田町朝来・岩崎・白浜町大古・安宅・十九淵	2013.08.21～2014.02.28	—	国土交通省（近畿地方整備局）
10	都市計画道路西脇山口線（園部・六十谷）道路改良工事に伴う六十谷遺跡出土遺物等整理業務	和歌山市六十谷	2013.04.22～2013.08.12	—	和歌山県
11	都市計画道路松島本渡線（神前南）道路改良工事に伴う井辺遺跡及び神前遺跡第２次出土遺物等整理業務	和歌山市井辺・神前	2013.07.31～2014.03.31	—	和歌山県
12	和歌山橋本線道路改良工事に伴う神前遺跡第２次出土遺物等整理業務	和歌山市神前	2013.04.30～2014.03.31	—	和歌山県
13	近畿自動車道松原那智勝浦線すさみ西インターチェンジ（仮称）事業に伴う立野遺跡出土遺物等整理業務	西牟婁郡すさみ町周参見	2013.10.01～2014.03.19	—	和歌山県

文化財建造物の保存修理技術指導業務等

	受託業務の名称		所在地	実施期間	棟数	委託機関等
A	重要文化財	丹生都比売神社本殿保存修理技術指導	伊都郡かつらぎ町	2013.04.01～2014.03.31	4 棟	宗教法人丹生都比売神社
B	重要文化財	琴ノ浦温山荘浜座敷ほか２棟保存修理技術指導	海南市船尾	2013.06.03～2014.03.31	3 棟	公益財団法人琴ノ浦温山荘園
C	重要文化財	東照宮唐門ほか３棟保存修理技術指導	和歌山市和歌浦	2013.06.03～2014.03.31	4 棟	宗教法人　東照宮
D	重要文化財	旧西村家住宅保存管理計画作成	新宮市新宮	2013.06.04～2014.03.31	1 棟	新宮市
E	重要文化財	慈尊院弥勒堂保存修理技術指導	伊都郡九度山町	2014.01.01～2014.03.31	1 棟	宗教法人　慈尊院
F	国史跡	熊野三山史跡等保存整備技術指導	田辺市本宮町	2013.05.15～2014.03.31	5 棟	宗教法人熊野本宮大社
G	国史跡	丹生都比売神社境内史跡等保存整備技術指導	伊都郡かつらぎ町	2013.05.15～2014.03.31	3 棟・1 基	宗教法人丹生都比売神社
H	国史跡	金剛峯寺境内史跡等保存整備技術指導	伊都郡高野町高野山	2013.07.10～2014.03.31	4 棟	公益財団法人高野山文化財保存会
I	国史跡	高野山金剛峯寺伽藍中門再建工事技術指導	伊都郡高野町高野山	2013.04.01～2014.03.31	1 棟	宗教法人　金剛峯寺
J	伝統的建造物群保存地区	湯浅町湯浅伝統的建造物群保存地区保存修理技術指導	有田郡湯浅町湯浅	2013.05.29～2014.03.25	—	湯浅町
K	県指定文化財	旧県会議事堂解体工事に係る痕跡調査・実測及び写真撮影並びに資料調査の補助	岩出市根来	2013.05.01～2013.06.07	1 棟	特定非営利活動法人京都文化財建造物研究所
L	県指定文化財	旧県会議事堂移転工事に係る設計補助	岩出市根来	2013.11.01～2013.12.26	1 棟	特定非営利活動法人京都文化財建造物研究所
M	登録文化財	旧橋本本陣池永家住宅主屋ほか３棟保存修理技術指導業務	橋本市橋本	2013.11.01～2014.03.31	4 棟	池永　洋三

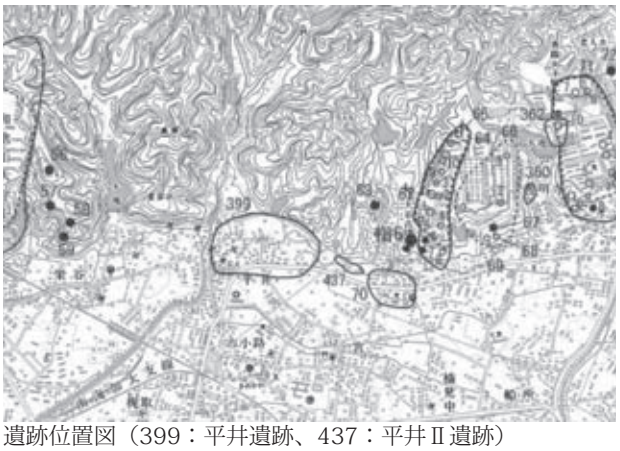
平成25(2013)年度　受託業務所在地図

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物整理



平井遺跡及び平井Ⅱ遺跡（第３次）の発掘調査

遺跡の時代：弥生時代・古墳時代・奈良時代・中世
所　在　地：和歌山市平井・大谷
調査の原因：一般国道 26 号第二阪和国道建設
調 査 期 間：2013.07 ～ 2014.03
調査コード：13-01・399 ／ 437


遺跡位置図（399：平井遺跡、437：平井Ⅱ遺跡）

はじめに

一般国道２６号第二阪和国道建設に伴い、和歌山市平井所在の平井遺跡と、東側に隣接する和歌山市大谷所在の平井Ⅱ遺跡で発掘調査を行った。平井Ⅱ遺跡は平成 24 年 5 月～ 10 月に第 1 次調査、平成 24 年 12 月～平成 25 年 3 月に第 2 次調査が行われており、今回は第 3 次調査になる。

調査地は道路建設用地のため、南東から北西方向に伸びる長方形を呈しており、平井遺跡は長さ約 200 m、幅は約 45 mの範囲の中で 6,495㎡を対象に調査を行った。平井Ⅱ遺跡（第 3 次）は長さ約 130 m、幅は約 35 mの範囲の中で 3,636㎡を対象に調査を行った。両遺跡の合計した面積は 10,131㎡となる。

遺跡は現在の紀ノ川河口から約 5 ㎞遡った北岸の丘陵裾部に位置しており、周辺には馬冑（ばちゅう）や馬甲（ばこう）をはじめ、朝鮮半島との深い関わりを示す遺物が出土した大谷古墳や、倉庫と考えられる大型掘立柱建物群が並んだ状態で検出された鳴滝遺跡、多量の初期須恵器（陶質土器）が出土した楠見遺跡など、古墳時代の遺跡が点在しており、朝鮮半島の影響を色濃く表している地域といえる。

遺跡周辺航空写真（左：平井遺跡、右：平井Ⅱ遺跡）

調査の成果

平井遺跡では古墳時代・奈良時代・中世の遺構を調査区の全域から検出した。また、遺構は検出されていないが弥生土器が出土している。特に古墳時代の遺構や遺物が多く検出されている。

古墳時代の遺構として調査区西端部の丘陵裾部で、古墳の横穴式石室を検出した。古墳の横穴式石室は後世の大幅な削平により、底部の石が２段分ほど残っているのみである。また、石室から西に約 12 m離れた位置では、石が抜き取られたと考えられる方形の石室痕跡を検出した。周辺に大型の角張った石が多く散乱していたため、後世に破壊されたものと考えられる。両遺構の間を中心に土師質の陶棺の破片が多く出土している。陶棺の破片の出土は県内では４例目である。他の例と比べ破片数も多く、蓋や脚の一部、身の接合部、赤彩された破片も出土しており、貴重な出土例といえる。一方、調査区東側の丘陵裾部では、埴輪窯を２基検出した。窯の状態は比較的良好であり、内部からは円筒埴輪や馬や家などの形象埴輪が多く出土している。また、埴輪窯の周囲からも多くの円筒埴輪や形象埴輪が出土している。

平井遺跡　古墳の横穴式石室（南東上から）

奈良時代の遺構としてピットや土坑、溝などを検出した。また、調査地の中央南側では、柱根が残存するピットを検出しており、大規模な屋敷跡と想定できる掘立柱建物であったと考えられる。この周辺では遺構の分布が南に広がる状況を示しているため、この方向に建物群が広がることが推定される。

中世の遺構としてピットや土坑、溝、井戸などを検出した。ピットの配置などから掘立柱建物が複数建てられていたことが想定できる。こちらも分布が南に広がる状況を示しているため、この方向に建物群が広がることが推定される。周辺からは素掘りや石組の井戸も検出しており、いずれも内部から瓦器椀が出土しているため、鎌倉時代と考えられる。

平井Ⅱ遺跡（第３次）では古墳時代・中世の遺構を検出した。古墳時代の遺構として土坑、ピット、柵列を伴う掘立柱建物などを検出した。調査地の東端で検出した長軸約 3.2 m、短軸約 1.9 m、深さ約 0.2 mの楕円形の土坑からは、初期須恵器と考えられる高坏の坏部が出土しており、5 世紀前半の時期と考えられる。調査区の中央南側では、南側を除くコの字状の杭列とそれに伴う掘立柱建物と考えられる柱穴を検出した。杭は径約 0.25 m、深さ約 0.2 mで、西列で９本、北列で８本、東列で７本の計 22 本（重複する２本を除く）である。また、東列の東側には深さ約 0.15 mの浅いピット４基を検出し、杭列の中央には径約 0.3 m、深さ 0.1 ～ 0.3 mの柱穴と考えられるピット４基を検出した。出土遺物は土師器が数点と極めて少量であり、埋土から判断すると古墳時代に帰属する可能性が考えられる。古墳時代に帰属する遺構は北西側の丘陵からの傾斜地で比較的多く検出されたものの、中央から東側では希薄であった。

平井Ⅱ遺跡　杭列・掘立柱建物（北から）

中世の遺構としてピット、井戸、木組み遺構、鋤溝状遺構を検出した。調査区中央で検出した方形の木組み遺構は、掘り方径約 0.7 m、深さ約 0.3 mを測る。四辺には縦方向に板を並べ、四隅には縦方向に杭を打ち込んでいたと考えられる。底板は確認されていない。埋土から瓦器椀が数点出土している。中世に帰属する遺構は、調査地中央から東側で比較的多く検出された。

まとめ

今回の調査において平井遺跡、平井Ⅱ遺跡（第３次）の両遺跡で検出した遺構の大半は古墳時代と中世の時期のものであった。平井遺跡では調査地全体が土地利用のための削平・盛土により、地形が大きく変化しているものの、丘陵裾部において埴輪窯や古墳の横穴式石室を検出したことは大きな成果であった。また、埴輪を中心とした多量の遺物が出土している。今回の調査で、この地域において複数の古墳を確認したことにより、調査地西側にも古墳が展開している可能性が考えられる。また、埴輪窯の発掘は県内で初の調査事例となり、近畿地方においても調査事例は少なく大変貴重である。古墳時代の和歌山の歴史を再考する上でも大きな成果であった。特に対岸の岩橋千塚古墳群と酷似する埴輪が出土している点は極めて重要であり、今後実施される整理作業において新たな知見が得られることが期待される。

平井Ⅱ遺跡（第３次）においては、古墳時代の遺構密度は希薄であり、遺物の出土も少なかった。これまでの調査から推測すると生活の中心は標高の高い北東側に展開すると考えられる。標高の低い地域が生活域となるのは、中世以降と考えられ、紀ノ川の旧流路が変遷したことが窺える。　（山本　光俊）

平井Ⅱ遺跡　木組み遺構遺物出土状況（南東から）

平井遺跡（第２次）・平井Ⅱ遺跡（第４次）の発掘調査

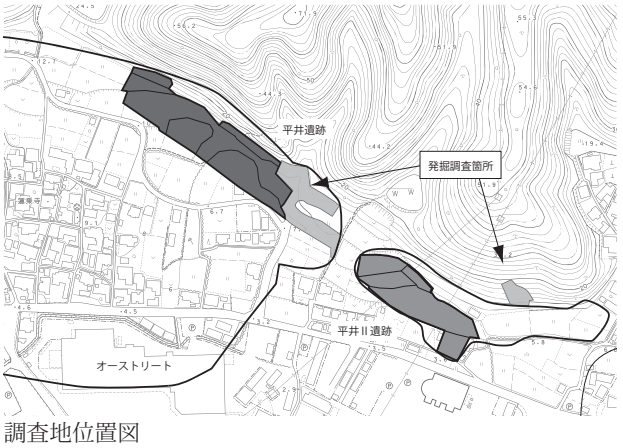
遺跡の時代：中世（鎌倉時代）・江戸時代
所　在　地：和歌山市平井
調査の原因：一般国道 26 号第二阪和国道建設
調 査 期 間：2013.10 ～ 2014.02
調査コード：13-01・399-2、13-01・437-4

はじめに

平井遺跡および平井Ⅱ遺跡は和歌山市平井に所在する。現在の紀ノ川河口より５㎞遡った右岸の丘陵裾部に位置する。遺跡の周辺地形は、北側背後に横たわる和泉山脈から南に派生する尾根と尾根の間を南流する小河川によって形成された扇状地と、紀ノ川の堆積による沖積地に分けられる。

調査地の東約 1.5㎞の範囲内の丘陵上には、県下でも名高い古墳・古墳群が存在する。晒山古墳群の南西部、通称背見山の尾根の先端には、昭和 32 年に調査され、組合せ式家形石棺や馬冑が出土した大谷古墳がある。また、遺跡では平井Ⅱ遺跡の南東約 150m 地点に、楠見式と称される陶質土器が出土した楠見遺跡、1.3㎞東には７棟の掘立柱建物が整然と並んだ倉庫群が見つかった鳴滝遺跡がある。このように調査地一帯は、楠見遺跡や大谷古墳に見るように朝鮮半島の影響を強く受けた５～６世紀の遺物が出土することから半島との関係が類推されている。

本調査は本年度同時期に実施された平井遺跡第１次調査の東側を 1,884㎡と、平井Ⅱ遺跡第３次調査の東側の丘陵裾部を 309㎡実施した。



調査地位置図

調査の成果

【平井遺跡】調査地は北から南に緩やかな斜面となる丘陵裾から平坦地である。調査地の中程には現有の池が存在し、その殆どが埋没状態となっている。遺構検出面は、この池を挟んで北と南で大きく比高差がつき、調査の便宜上、北側を上段、南側を下段とした。

上段で検出した遺構は奈良時代の土坑状遺構、中世（鎌倉時代）の溝状遺構、ピット等である。

奈良時代の土坑状遺構の規模は直径約 4.3 ｍのほぼ円形を呈し、残存の深さは中心部の最も深い箇所で 0.6 ｍを測る。ここからの出土遺物には古墳時代の須恵器坏・甕、形象埴輪片、奈良時代の製塩土器、土錘などが混在して出土した。奈良時代の廃棄土坑と考えられる。中世の溝状遺構は、斜面に対し平行に数条を検出した。ここからは主に瓦器片が出土した。

下段で検出した遺構には奈良時代の土坑状遺構・柱穴、中世（鎌倉時代）の土坑状遺構、地鎮坑、溝状遺構等を検出した。奈良時代の土坑状遺構からは土師器坏が出土した。中世の地鎮坑から完形の瓦器椀が２個出土し、正位に置いた上からもう一つを伏せた状態で置かれていた。五穀等が入れられていたのであろうか。

【平井Ⅱ遺跡】遺構密度は希薄で、検出した遺構は土坑状遺構とピットである。土坑状遺構からは須恵器片、埴輪片等の古墳時代の遺物が出土した。

まとめ

今回の調査で検出した遺構の殆どが中世のもので、出土した遺物も古墳時代と奈良時代のものは微量であった。西に隣接した１次調査では古墳や埴輪窯等の古墳時代を中心とする遺構が検出された。このような状況から判断して、調査地周辺は古墳時代、奈良時代、中世において、土地の改変がなされたとみられる。（佐伯　和也）

奈良時代 土器廃棄土坑（東から）

山口古墳群の発掘調査

遺跡の時代：近世
所　在　地：和歌山市上黒谷
調査の原因：一般国道 24 号京奈和自動車道建設
調 査 期 間：2013.11 ～ 2013.12
調査コード：13-01・138

はじめに

山口古墳群は、和歌山県と大阪府との境をなす、東西に横たわる和泉山脈の南裾部分にあたる箇所に所在しており、今回の調査地点である 10 号墳と考えられていた丘陵頂部で標高約 175 mを測る。

この 10 号墳については、試掘調査の結果、古墳ではなく自然地形であることが判明したが、この試掘調査で礫石経の埋納遺構が見つかったことから本調査を実施する運びとなったものである。

調査の成果

調査区頂部の試掘調査で一字一石が集中して見つかっていた箇所において、遺構精査をおこなった結果、直径 60㎝、高さ 15㎝ほどの土饅頭状に礫石経が積み上げられ置かれている遺構を検出した。

用いられた石は２～４㎝大の扁平な川原石で、現地で確認する限りは大部分に経文の一字と思われる漢字が墨書されていた。

設置されていた箇所は、わずかに窪んではいたが、これを設置するためわざわざ掘り込んだという状況ではなく、表土を取り除いた上に据え置いたものと考えられる。また、据え置かれた地盤は軟質の岩盤で、この岩盤を掘り抜き賢瓶などが埋められていた痕跡はまったく検出されなかった。検出された状況が土饅頭状に盛り上がっており、比較的当時の現況を保っていると考えられることから、露出していたものではなく、土饅頭に築いた後、土を被せていたものと思われ、おそらく当初にはその傍らに木標や石碑などの地上標識が設置されていたものと推定される。

なお、調査区全域においてこうした遺構がさらにある可能性をもとめて精査を加えたが、結果的にはこの一基のみの検出にとどまった。検出された場所が頂部の南側で、平野部を眺望するに適した箇所であったことを考えると、あえてこの箇所を選定し埋納したことが窺えると言えよう。

まとめ

今回の調査で確認することができた礫石経埋納遺構については、土器などの共伴遺物がまったくなく、時期については明確にし難い状況であるが、全国の類例や県内の傾向から推して江戸時代のものと考えるのが妥当と思われる。

その造営目的や主体者についても現段階では不明といわざるを得ないが、当地が修験道のルートのひとつに当たっていることからその関連の可能性も考えられよう。それとともに近世にはいるとこうした仏教的作善業の勧進として六十六部、いわゆる廻国聖が深く介在した例が知られており、その可能性も視野にいれておく必要があるものと思われる。　　（村田　弘）

礫石経検出状況

礫　石　経

和歌山城跡の発掘調査

遺跡の時代：近世・近代
所　在　地：和歌山市二番丁
調査の原因：和歌山地方合同庁舎新築
調 査 期 間：2013.08 ～ 2014.03
調査コード：13-01・379

はじめに

和歌山城跡は和歌山市の中心部にあり、史跡和歌山城を取り巻くように位置する。旧三の丸にあたり、紀州徳川家重臣の上屋敷が集中していた地域である。調査区は和歌山城東堀のすぐ東側に位置し、絵図史料から、当地における江戸時代の武家屋敷変遷がうかがえる場所でもある。

今回の調査は、和歌山地方合同庁舎新築に伴うものであり、庁舎及び配管予定地 2,824㎡の調査を行った。

調査の成果

調査では、全部で 4 面の遺構面を確認した。

第 1 遺構面

19 世紀前半から昭和 20 年までの遺構面である。全面が標高 3.0 mで平坦であることから、調査区全てが佐野家の屋敷地となり一体的な土地となった以後の時期と考えられる。

土坑内に、底部穿孔した鉢を伏せて置いた遺構を 2 基検出した。上部施設は残存していないが、その特徴から水琴窟であると考えられる。このことから、近くに庭園等が存在する可能性があるが、検出されていない。

調査位置図（1:25000）

また、瓦積井戸を 2 基検出した。これらは 19 世紀に構築されたものと考えられるが、井戸枠内から被熱したガラスや瓦等が出土し、昭和 20 年の和歌山大空襲前後まで使用されていたものと考えられる。

第 2 遺構面

18 世紀中頃から 19 世紀前半までの遺構面である。屋敷地を東西に分割する境界施設を境にして西側が標高 2.8 m、東側が 2.6 mで平坦となる。これは、当所が東西に 2 分割されていたことを示し、東側に安藤家、西側に佐野家の屋敷があった時期にあたる。

石を 3 列に並べた幅 1.4 m、検出延長 15 mの石列遺構（遺構 86）を検出した。中央の列には平らな砂岩を使用し、両側の列は結晶片岩を使用して石垣状にする。このことから、遺構の上部には心柱を持つ土塀があり、この石列は屋敷地境界であった土塀の基礎であると考えられる。

また、調査区東側では南北 8.0 m、東西（検出長）4.5 mの落込状遺構（遺構 212）を検出した。南寄りに瓢箪形に石を巡らせて島状にした場所があること、一部に 0.5 ～ 1.0㎝大の円礫を敷いた場所が残存していることから、武家屋敷庭園の苑池跡の可能性がある。

水琴窟（遺構 78）

土塀基礎（遺構 86）

第 3 遺構面

17 世紀中頃から 18 世紀中頃までの遺構面である。屋敷地を東西に分割する境界施設を境に西側が標高 2.6 m、東側が 2.4 mで平坦となる。西側の敷地は境界施設で南北に分割されており、東側に安藤家、西側の南部に大高家、北部に佐野家の屋敷地があった時期にあたる。

屋敷地境界と考えられる南北方向及び東西方向の溝（遺構 368・遺構 436）を確認した。いずれも溝の左右に等間隔に柱穴があることから、境界溝の左右に各屋敷の塀が構築されていたと考えられる。

調査区西半では、地下式倉庫と考えられる長細い平面プランを持つ遺構を 3 棟検出した。南側の 2 棟（遺構 360・遺構 361）は長辺を東西に向け、長辺側に階段状の入口部を持つ。北側の 1 棟（遺構 451）は、長辺を南北に向け、短辺に梯子を取り付けたと考えられる痕跡がある。この構造の違いは、その敷地を拝領していた武家が異なることに起因するものと考えられる。

また、調査区南東部で平面形が「く」の字を呈する大型の落込状遺構（遺構 437）を検出した。遺構縁辺部には石垣状の護岸を構築している状況が確認でき、西側に出島状の張り出しが認められることから武家屋敷庭園の苑池跡である可能性が考えられる。

第 4 遺構面

17 世紀中頃以前の遺構面である。西側から東側へ緩やかに傾斜しており、第 1 遺構面から第 3 遺構面の様相とは異なっている。

木枠井戸及び素掘井戸を検出した。どの井戸も直径いずれも 1.0 m程度であり、井戸の掘削に子供が関わっていたことが推測される。

また、塵芥溜と考えられる土坑を検出した。土坑内から陶磁器・瓦・漆器碗・箸等が出土している。これらは第 4 遺構面で検出したものであるが、土層検討の結果、第 3 遺構面に属する遺構も含まれている。

まとめ

本調査では土塀基礎、屋敷地境界溝、柱穴列等の武家屋敷を区画する施設の痕跡が確認された。この調査成果は絵図史料との比較を可能にし、武家屋敷地の変遷とその景観を検討するための資料となる。また、武家屋敷内部の庭園遺構と考えられる苑池状遺構も検出され、当所にあった江戸時代武家屋敷の敷地利用を検討するための貴重な資料となることが期待される。　（髙橋　智也）

苑池状遺構（遺構 212）

地下式倉庫（遺構 361）

屋敷地境界溝（遺構 436）

苑池状遺構（遺構 437）

和田遺跡の第２次発掘調査

遺跡の時代：弥生時代・古墳時代
所　在　地：和歌山市和田
調査の原因：秋月海南線道路改良工事
調 査 期 間：2013.04 ～ 2013.09
調査コード：12-01・301-2

はじめに

和田遺跡は和歌山市和田に所在する。本遺跡は紀ノ川の南岸、和歌山市南東部の和田盆地に位置する。遺跡の北側には和田川が西流し、これにより形成された低湿な沖積地である。

周辺の遺跡には、弥生時代全般を通じての井辺遺跡や神前遺跡が和田川の北方に展開している。古墳が目立って多く、北側には県下で最大級の岩瀬千塚古墳群、井辺前山古墳群、森小手穂埴輪窯、西には和田古墳群、和歌山県で唯一の陵墓としての竈山神社古墳や、県下で４例目の琴柱形石製品が出土した坂田遺跡が近接している。また、今回の調査地の中央には古墳時代を起源とする宮井用水が北から南に流れ、周辺一帯には条里遺構が良好に残っている。

本調査は、第１次調査の南側の水田を 4,548㎡実施した。

調査の成果

調査は、中央を流れる用水路を限って、東側と西側では検出遺構の様相が大きく違った。

東側の下面では、弥生時代から古墳時代にかかる流路を２条、上面では古墳時代の土坑状遺構を検出した。

２条の流路の内の１条は、第１次調査で検出したものの続きである。新たに検出した流路は、西流するもので、幅は 12 ～ 14m を測り、深さは 0.4 ～ 0.5m である。埋土は 3 層の粘性の強いシルト層に分層でき、東側の調査区のほぼ全域で検出した。また、肩口には土器溜りも検出した。

西側で検出した主な遺構は、弥生時代中期の土坑状遺構１基、弥生時代後期の井戸１基、古墳時代の掘立柱建物２棟、土器埋納遺構２基、奈良時代の井戸１基を検出した。

弥生時代中期の土坑状遺構は直径 7.1 × 7.3m、深さ 0.1 ～ 0.15m と浅く、ここからは土器が多量に出土したが遺存状態が不良であった。弥生時代後期の井戸状遺構は直径 1.4m、深さ 0.9m を測り、底からは甕が出土した。古墳時代の掘立柱建物は、桁行３間×梁行２間、桁行４間×梁行３間の２棟を検出したが、削平が著しく残存の深さは 0.1 ～ 0.3m と浅い。古墳時代の土器埋納遺構からは須恵器杯身、土師器甕、ミニチュア土器、土師器椀が出土した。奈良時代の井戸は木製の井戸枠が遺存しており、底からは土師器薬壺・甕が出土した。

まとめ

今回の調査で検出した遺構の時期は概ね弥生時代中期・後期、古墳時代、奈良時代のものであった。

調査区中央の水路を挟んで、遺構のあり方が大きく異なることが判明した。水路より東側については湿地上に旧流路が巡り、西側については弥生時代中期～奈良時代の直接生活に関わる井戸や建物遺構が検出された。これらのことから和田遺跡における居住域は、調査地の西側に存する独立丘陵の雨霧山（通称薬師山）の裾野から放射状に延びる微高地上に求められると思われる。従って、調査地の西側に展開している現在の集落域と大差のないものと考えられる。　（佐伯　和也）

調査地位置図

航空写真（東から）

根来寺遺跡の発掘調査

遺跡の時代：中世
所　在　地：岩出市根来
調査の原因：一般国道 24 号（京奈和自動車道）建設
調査　期間：2013.05 ～ 2013.08
調査コード：13-11・016

はじめに

調査地は急斜面上にあるわずかな広さの平坦地であったが、今回の調査により岩盤を切り開いて造成されたことが確認され、この場所が建物を建てるための敷地を確保したものであったことが明らかとなった。

ここには建物の土台としての敷地を強固にするためと考えられる石垣が構築されており、その裏側に 10 から 20㎝程度の礫を詰めて栗石としていたほか、斜面裾には石蓋をした排水溝が設けられており敷地内の排水に対しては周到に整備された様子が窺えた。

長い年月の経過による斜面の崩落により、石垣をはじめとする遺構の残存状態はいいものではなかったものの、このことは当該地点の立地条件の厳しさをよく示すものといえ、石垣や排水溝はそのことをよく把握した上で対策として構築されたものと考えられる。

調査の成果

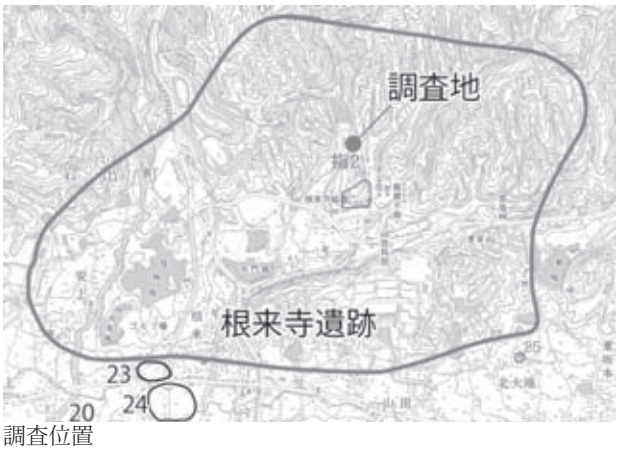
敷地の縁辺に巡らせた石垣は２～４段が残存しており、断崖に面した南側及び西側のほか、東側にも構築されていた。この東側の石垣は斜面裾に設けられた排水溝の側壁も兼ねていることから、単に一定の広さの敷地を確保するためだけのものではなく、崩落を防ぐため敷地に流れ込んだ水を速やかに外部へ導く役割があったとみられる。栗石は結晶片岩を利用しており、一帯の斜面にみられる露頭と同じであることから、この場所の造成に伴って生じた砕石である可能性が高い。このような片理に沿って割れた礫は比較的大きな間隙をつくることになり、排水には有効であったものと推定される。

遺物は軒丸瓦、白磁片、土師皿等があり、敷地内を整地したとみられる土の表面上（遺構検出面）や、排水溝の埋土から出土した。いずれも時期は 16 世紀末頃のもので、羽柴秀吉による紀州攻めにより根来寺が衰退した時の年代と一致する。また、調査区付近では同時期の遺物と考えられる一石五輪塔を表採している。

（寺西　朗平）

石垣（南東から）

排水路（南から）



調査位置

小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生時代～江戸時代
所　在　地：御坊市湯川町小松原
調査の原因：湯川中学校改築工事
調 査 期 間：2013.05 ～ 2013.12
調査コード：13-24・024、13-24・025

はじめに

小松原Ⅱ遺跡は、古い時期の日高川が形成した自然堤防上に位置する縄文時代後期・弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。ＪＲ御坊駅から紀央館高校・湯川中学校にかけて展開しているが、周辺には多くの遺跡が集中し、江戸時代になるまでは、各期を通じて日高地方の中心地として栄えたところである。

湯川氏館跡は、小松原Ⅱ遺跡の一画にあって小松原館とも言い、室町幕府の奉公衆で、日高地方を拠点に有田・牟婁地方に影響を及ぼした湯川宗家の館跡である。ちなみに湯川町の町名は湯川氏に由来するもので、紀央館高校の校名も、湯川氏館の跡地に築かれていることによるものである。

発掘調査は湯川中学校改築工事に伴うもので、御坊市の委託を受けて面積 3,787㎡を対象に実施した。調査区は体育館部分の調査区１と校舎部分の調査区２に分かれ、弥生時代から近世にかけての遺構・遺物がみつかった。

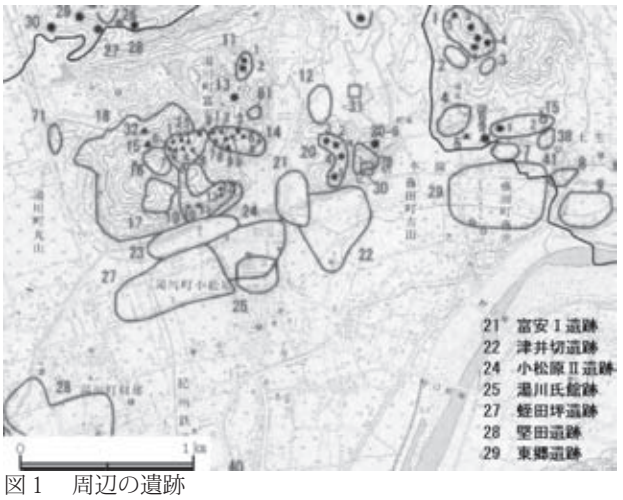


図１　周辺の遺跡

調査の成果

弥生時代　検出した遺構はすべて中期のもので、竪穴建物５棟・溝３条・土器棺墓１基・土坑などがある。竪穴建物はすべて調査区１みつかっているが、すぐ北側でも以前に１棟確認されている。調査区２でみつかっている 266・270 溝を境に南東側では弥生時代の遺構がほとんど存在しないことから、これらの溝は集落の内外を区画する目的で掘削された可能性がある。

竪穴建物のうち、024 建物は火災で焼けている。残りは良くないものの、炭化した垂木や柱材の上に焼土が認められたことから、屋根の上を土で覆っていた可能性もある。また、炭化木や焼土の上に同形態の壺が数個体伏せられた状態で出土していることから、焼失した後に、祭祀をおこなったと考えることもでる。

土器棺は、003 建物の壁を抉るように掘った小さな穴に埋められていた。口縁部を打ち欠いた甕に高杯の杯部を被せたもので、早世した小児を屋内に埋葬したものと考えられる。

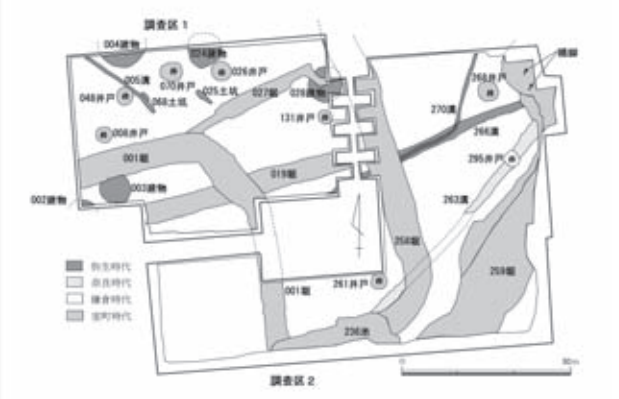


図２　検出した遺構

写真１　弥生時代の竪穴建物（028 建物）

奈良時代　検出した遺構は 263 溝のみで、須恵器や土師器とともに軒丸瓦などが出土した。軒丸瓦は道成寺創建期の瓦と同形式であるが、周辺では以前から古代の瓦が出土していることからも、創建が白鳳時代に遡る寺院が付近にあったと判断できる。また、この寺は、「日本霊異記」に登場する「別寺」の可能性もある。

鎌倉時代　検出した遺構は、板を方形に組んだ 295 井戸のみである。この時代の遺物としては、調査区南東部の谷状遺構から土器類とともに角塔婆などの木製品が多く出土している。以前にも紀央館高校の敷地から同じ時期の土器が、仏教関係の遺物とともに多量にみつかっていることから、鎌倉時代にも付近にお寺が存在したことが窺える。

室町時代　堀（溝）４条・井戸７基・池などがあり、すべて湯川氏館に関係すると考えられる。また、堀・井戸は、すべてが併存するものではなく、少なくとも３時期を想定することができ、館の改修などに伴って埋戻しや掘削を行っていると判断できる。

調査区２の東でみつかった 259 堀は、幅 11 m、深さ約２mで、規模から館東を区切る外堀であると考えられる。調査区北東部では堀がＣの字状に湾入しているが、東肩が調査区外であることから全容は明らかでない。ただ、この湾入した部分の堀底には橋脚と考えられる２本の柱があり、館への入口に架けられた橋が存在したと考えられる。

001 堀は幅４～６m、深さ 0.8 ～ 1.2 mあり、調査区内で屈曲して南側は 236 池に繋がる。この池は調査区南隣に鎮座する湯川神社の社殿前の池と繋がることが想定でき、その続きが紀央館高校の調査でもみつかっている。おそらく社殿が築かれている高まりを巡るように池が掘削されていたと考えられ、館の庭園の池泉であったと考えられる。また、001 堀の続きは、紀央館高校の敷地でも３箇所でみつかっており、それらを繋ぐと、池の北側にある東西約 40 m、東西約 30 mの方形区画を巡っていたと判断することができる。

方形区画の北側では、大小の土師器皿が多量に出土し、カワラケを使った儀式をおこなっていたと考えられる。また、池に近い南側では、輸入陶磁器などの高級品がセットで多量に出土し、饗宴がおこなわれていたと考えられる。この一画が庭園と考えられる池に面していることからも、方形区画周辺に主殿や会所が存在した可能性がある。

室町時代の井戸には、井戸側が石積みのものが６基あり、このうち 008 井戸は、底付近に方形枠を設けて、その中央に曲物を据えていた。また、桶状の井戸側をもつ 070 井戸は、底に方形枠を設けて、その中央に桶を据えていた。

遺物は土器類や瓦類のほか木製品なども多く出土し、館内での生活を窺うことができる。木製品のなかには焼けて炭化したものもあり、焼けた瓦や焼土なども出土している。このことから、館は焼失していることが窺え、これは文書資料などから明らかになっている天正十三年（1585）の羽柴秀吉の紀州攻めに係るもので、同時に館は廃絶したと考えられる。

今回、湯川氏館の東側を区画する堀がみつかり、以前からの調査成果を含めて判断すると、館は東西約 225 m、南北約 200 mの規模で、各地の守護館に匹敵する規模をもつことが明らかになった。（川崎　雅史）

写真２　室町時代の堀（259 堀）

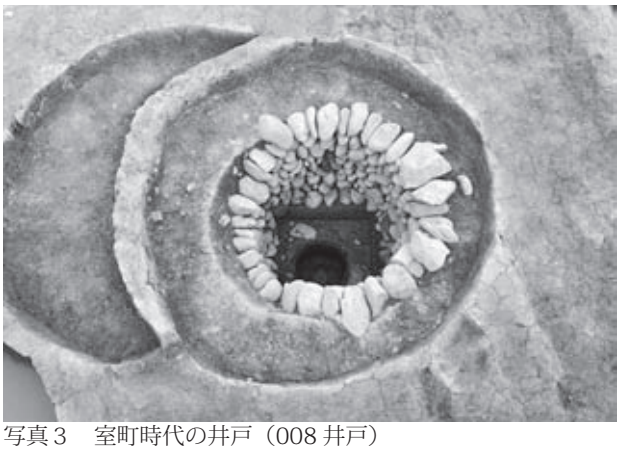


写真３　室町時代の井戸（008 井戸）

東渋田遺跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生時代・中世
所　在　地：伊都郡かつらぎ町東渋田
調査の原因：和歌山橋本線道路改良工事
調査期間　：2013.06 ～ 2013.11
調査コード：13-07・007

はじめに

東渋田遺跡は、和歌山県伊都郡かつらぎ町大字東渋田・西渋田・島に所在する。今回の調査地はこの遺跡のほぼ中央に該当し、調査地のすぐ南側付近で段丘崖となり、調査地の更に東側には、紀ノ川の支流である四巴川が南北に流れている。

調査区は大門橋南口から南へ延びる旧高野街道をはさんで大きく西側地域と東側地域の２箇所に分かれる。西側地域を１・２区、東側地域を３～９区と仮称し、土置き場や隣接する居宅への通路確保のため全体を４回の工程にわけて調査を実施した。

調査の成果

今回の調査を概観すると、西側の調査区である１・２区においては遺構密度は低い状況であった。この付近はベースの土も礫質となっており、居住域には適しなかったものと考えられる。これに比べて３区以東については、ベースの土もシルト質でしっかりしており、全体に遺構密度が高く、弥生時代の溝・土坑・竪穴住居などの遺構が検出されている。

このうち３区で検出された溝の幅はもっとも広いところで 2.1 m、狭いところで 1.5 mほどを測る。深さは 0.3 mほどで、上弥生時代中期前葉と思われる壷の大振りの破片が出土している。この溝については、何かを囲繞するように屈曲していることや時期的なことから方形周溝墓の溝である可能性も考えられよう。

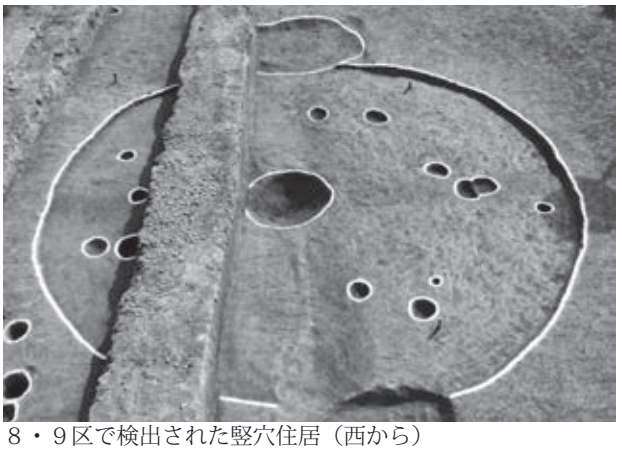
竪穴住居は２棟検出されているが、このうち８区から９区にまたがって検出された竪穴住居は、ほぼ全容のわかる状態で検出している（写真参照）。円形の竪穴住居であるが、南北 5.75 m、東西 5.40 mとやや南北に長くなっている。炉は１m弱の円形で、深さは 0.3 m強を測る。かつらぎ町域では炉の周囲が一段高くなった状況、いわゆる炉堤を伴うものがいくつか知られているが、この炉については炉堤は確認できなかった。

まとめ

今回の調査では弥生時代中期前半と思われる遺構・遺物の多いことが特徴である。かつらぎ町域及びその近隣においては、これまでこの時期の遺構・遺物が確認されておらず空白となっていたが、今回の調査によりその空白を埋める資料を得たものといえよう。

調査区の北側 50 mほどに所在する渋田小学校の発掘調査でも、集落が形成されるのは弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけてとされている。この結果から今回の調査地付近に中期前半にまず集落が形成され、その後一時途絶えた後、場所を北側に移して集落が再形成されたとも考えられる。これらの詳細な考察については、今後の整理を含めた中で検討していきたいと思っている。　（村田　弘）

調査地遠景（西から）


８・９区で検出された竪穴住居（西から）

神前遺跡の第２次出土遺物等整理

遺跡の時代：弥生時代～近世
所　在　地：和歌山市神前
調査の原因：和歌山橋本線道路改良工事
整 理 期 間：2013.05 ～ 2014.03
調査コード：09･10-01・307、11-01・307-2

弥生土器の産地・年代の検討状況

事業の概要

平成 21 ～ 23 年度の神前遺跡発掘調査で出土した遺物及び現地調査記録等について、第２次整理業務を実施した。作業は平成 25 年５月から平成 26 年１月まで、和歌山市岩橋整理事務所及び和歌山市新在家分室で行った。昨年度の第１次整理業務で基礎的な出土遺物整理を行っていたので、本年度は土器の復元・実測及び遺物・遺構のトレース・組版等を行い、発掘調査報告書を刊行した。出土遺物は 398 箱に収納し、和歌山県教育庁に移管した。

神前遺跡は弥生時代前期から江戸時代までの複合遺跡である。第２次整理業務では出土遺物の検討により弥生時代前期以降の水路と平安時代以降の屋敷地の変遷・発達過程がより具体的に分かるようになった。

弥生時代の谷の埋没状況

神前遺跡では、幅１～２m程度の小さな谷と、幅 10 m以上の大きな谷が確認されている。小さな谷筋を流れる 201 溝では、弥生時代前期の広口壺と庄内式期のタタキ甕が隣り合うようにして出土しており、谷筋は流れを微妙に変えながらも、ほぼ同一の場所を流れ続けていた状況がうかがえる。溝 201 は庄内式期に多数の土器を含む土で埋まっており、古墳時代前期の土坑が上面に形成されている。

大きな谷筋を流れる 5040 流路では、最下層が無遺物層とみられ、縄文時代晩期頃に埋まり始めたものと推定された。下層からは弥生時代前期の土器が多量に出土したが、下層の下端から出土した土器がこの谷で最も新しい段階の土器（櫛描き紋の土器片）であり、土層の堆積と出土した土器年代の順序に一部で逆転現象がみられた。谷は多数の溝状遺構や不整形土坑で不規則に埋まり、その上面に弥生時代中期以降の溝が形成されている。これらの状況を総合すると、大きな谷は縄文時代晩期に相当する時期から弥生時代中期初頭までの時間をかけて、谷底で再堆積を繰り返しながら次第に埋まっていったという状況が浮かび上がる。

谷や溝といった遺構どうしの新旧関係は切り合いで分かるが、各遺構内の堆積状況は複雑で、上層と下層の出土遺物に様式の差をみることは困難であった。なお、谷の上面では排水機能の高い溝が多数検出されており、地形に逆らって流れる用水機能の高い溝は、弥生時代前期の 7002-8002 流路など少数であった。

また、神前遺跡周辺の丘陵は緑色片岩の岩盤で形成されており、石包丁は在地生産されているものと考えられる。弥生時代前期の遺構からは隅丸方形に近い形状の石包丁が出土し、中期には半月形や杏仁様の石包丁が製作されている。大型石包丁も３点出土しており、在地生産品と考えられる。

屋敷地と出土遺物

調査では付近を縦断する現・宮井用水「中溝水路」の下層溝の肩が確認されている。出土遺物は 13 世紀代の瓦器片が多く、近世までの遺物が含まれており、鎌倉時代から江戸時代までの用水路跡と推測される。鎌倉時代には、条里型地割に沿って掘立柱建物を中心とした施設が分布する状況も確認できる。

神前氏（中務氏）の屋敷地跡とみられる付近では、斜行溝からは平安時代後期の遺物、東西・南北方向の溝からは中・近世の遺物が出土している。近世屋敷地の石組遺構の埋土からは多数の陶磁器や瓦が出土しており、屋敷の発展がうかがえた。　　（丹野　拓）

井辺遺跡及び神前遺跡の第２次出土遺物等整理

遺跡の時代：弥生時代・古墳時代・鎌倉時代
所　在　地：和歌山市井辺・神前
調査の原因：都市計画道路松島本渡線
（神前南）道路改良工事
整 理 期 間：2013.08 ～ 2014.03
対象コード：10-01・308、11-01・308-1、11-01・307-1

当業務は、平成 22 年度・同 23 年度に実施した井辺遺跡及び神前遺跡の発掘調査業務で出土した遺物及び現地調査記録等の整理作業である。また、整理作業に伴い、次年度に調査報告書を作成する。

出土遺物等整理業務の概要

調査で出土した遺物は、昨年度に引き続き、注記・接合、遺物充填材による補強・復元、実測の一連の整理作業を行った。現地調査の遺構図面は、トレース・レイアウト図版作成作業を行い、遺構写真については遺構写真図版などを作成した。

出土遺物の基礎的な整理作業

出土遺物（土器･石器）は、調査現場での応急整理･昨年度の第 1 次整理業務で整理済みの物を省いて遺物に調査コードと出土遺物登録番号の注記作業・接合作業を行った。

基礎的な作業を経た主要遺物を対象に、遺物充填材による補強･復元作業･遺物実測･実測遺物台帳登録･遺物実測図仮レイアウト・遺物実測図の整理・トレース作業・レイアウト図版作成、遺物写真撮影、各種データ等の P.C 入力を行った。

井辺遺跡出土の弥生土器の実測作業

遺物写真撮影を行ったものから主な写真を抽出して調査報告書に掲載する遺物写真図版を作成した。

現地調査の遺構図面については、抽出した遺構図面のトレース作業・調査報告書に掲載するレイアウト図版作成作業を行った。

遺構写真については、現地調査で撮影した遺構写真から主立ったものを抽出して調査報告書に掲載する巻頭写真図版・遺構写真図版を作成した。

科学的な保存処理のできなかった木製品については、今後の保存と活用のためにバキュームシーラーによる真空パック詰め作業を行った。

応急整理・昨年度の第 1 次整理業務で各遺物群から抽出した種実について、分析・同定には専門的な知識が必要であるため、分析・同定を第三者に依頼した。

整理の成果

今次の整理作業をとおして、多数の弥生時代後期後半から古墳時代後期の土器・石器・木製品の観察を行うことができた。その大半が弥生時代終末期から古墳時代前期にかけてのものであると同時に、生活遺構から遊離した溝及び自然流路からの出土であった。これらの状況は、直近に居住域の存在を示すと共に、居住域からの生活用具の廃棄行動を探る上で重要な意味合いをもっている。

土器の大半は地元で製作されたものと思われるが、胎土の違いから紀の川下流域北岸、井辺・神前遺跡の南側の亀ノ川から日方川下流域にかけてのものが少数搬入されているようである。また、土器の中には、形態もしくは胎土から見て離れた地域からの搬入品と判断できるものが極めて僅かながら含まれている。主な土器に河内・阿波・東海・北陸と判断できるものがある。　（土井　孝之）

水漬け木製品の真空パック詰め作業

六十谷遺跡の出土遺物等整理

遺跡の時代：弥生時代・古墳時代・中世・近世
所　在　地：和歌山市六十谷
調査の原因：都市計画道路西脇山口線（園部・六十谷）
　　道路改良事業
整理　期間：2013.04 ～ 2013.08
対象コード：11-01・084、12-01・084、12-01・084-2

平成 23 年度に第 1 次調査、平成 24 年度に第 2 次・第 3 次調査の発掘調査によって出土したコンテナ 39 箱分の遺物及び現地調査記録等の整理作業を実施した。遺物の洗浄は、発掘調査時の応急整理作業により実施済みであった。出土遺物の作業は、注記・遺物破片点数の登録集計・接合・復元・実測・トレース作業を行った。また、現地調査の遺構図面は報告書用図面の作成を行い、デジタルトレースで遺構図面は作成した。

整理作業を行った出土遺物は、弥生時代前期から古代を除く近世までの遺物が見られた。中でも、調査地西側で出土した高杯は、皿状の杯部内側に放射線状にヘラミガキが施され、赤色の塗料が薄く残存していた。また形状は弥生時代中期の特長と考えられるものの、弥生時代中期には見られない特長が取り入れられていることから、土器の変遷についても注目される遺物である。その他、石製品も出土しており、石錘・石鏃・石杵・砥石等がある。サヌカイトの石核や多くのチップ、未製品が見られ『石鏃生産地』を考察する重要な資料となった。　（津村　かおり）

六十谷遺跡出土の弥生土器　高杯

立野遺跡の出土遺物等整理業務

遺跡の時代：弥生時代～古代
所　在　地：西牟婁郡すさみ町周参見
調査の原因：近畿自動車道松原那智勝浦線
　　すさみ西インターチェンジ
　　（仮称）の建設
作 業 期 間：2013.10 ～ 2014.03
調査コード：12-041・002

はじめに

今回整理業務の対象となった発掘調査では、弥生時代前期、中期～後期、古墳時代及び古代といった各時代の溝を重複して検出した。古代の溝は埋土に多量の木屑や木片を含むもので、木製品が出土している。

整理作業の成果

W15（長さ約 47㎝に復元可能、幅 10.9㎝、厚さ 1.2㎝）及び W16（長さ 25.5㎝、幅 8.9㎝、厚さ 1.0㎝）は形状や緒孔と考えられる穿孔の位置から、田下駄の足板である可能性が高い。どちらも水田内での沈み込みを防ぐための木枠をこの足板の下に取り付けていたものとみられ、W16 は緒孔のほかにその木枠を取り付けるための穿孔がある。

これらの木製品（3 点）については、高級アルコール法による保存処理を施した。　（寺西　朗平）

田下駄とみられる木製品（上 W16　下 W15）

近畿自動車道紀勢線事業に伴う第１次出土遺物等整理

遺跡の時代：弥生時代～中世
所　在　地：田辺市、西牟婁郡上富田町、白浜町、
調査の原因：近畿自動車道の建設
作 業 期 間：2013.09 ～ 2014.02

はじめに

整理業務の対象は近畿自動車道建設にともなう発掘調査で、平成 22 年度から平成 24 年度までに実施された八丁田圃遺跡、目座遺跡、稲成Ⅰ遺跡、塗屋城跡、大古Ⅱ遺跡、安宅本城跡、田ノ口遺跡、岩崎大泓遺跡、岩崎大泓Ⅱ遺跡である。

事業は平成 25 年度から 26 年度にかけて実施の計画で第１次と第２次に分かれ、今年度は第１次整理業務である。全ての遺物について洗浄、注記、登録作業を実施し、遺物の一部について接合・補強、復元作業と実測図の作成を行った。第２次整理業務では写真撮影等を行い報告書を刊行する。

整理作業の成果

整理業務は各遺跡ごとに出土した土器、石器等について洗浄、注記、台帳登録等を行い、さらに報告書に掲載する遺物を抽出し接合・補強、復元作業及び実測図の作成を行った。

今回の整理作業において、八丁田圃遺跡（2010 年度調査、２区）の出土遺物を洗浄・注記中に、石帯巡方の一部とみられる遺物を確認した。

古代の水田耕作土とみられる層の直上に堆積した土中から出土したもので、大部分は失われて小片となっており、表面は著しく摩滅している。残存するのはわずかに縦横 2.4 ～ 2.6㎝のみである。また、厚さは 0.7 ㎜を計る。裏面は隅角付近に、帯に留めるための孔が開けられており、潜り孔と呼ばれる技法で加工されている。確認できるのは１カ所のみであるが、他の出土例から、同様の孔が４隅に設けられている状態が復元でき、さらに透孔（長方形）も確認できる。

石帯巡方のどの部分にあたるものであるかは今後さらに詳細な検討を要するが、概ね復元例（図１）のとおりになるものと推定される。　　（寺西　朗平）

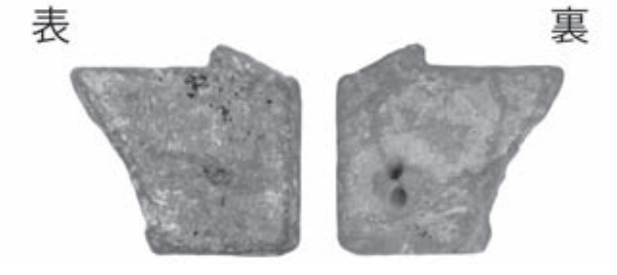


写真１　石帯巡方表面及び裏面

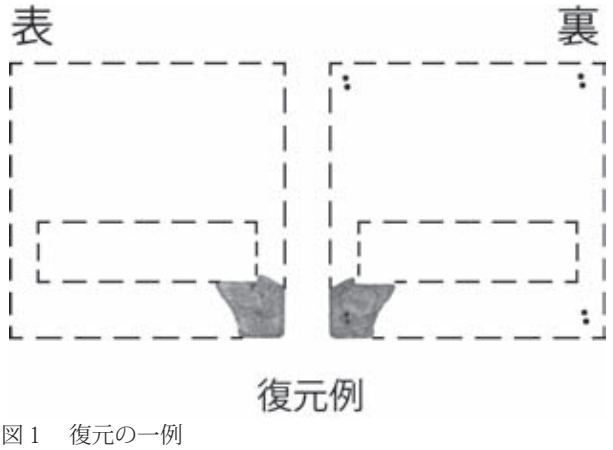
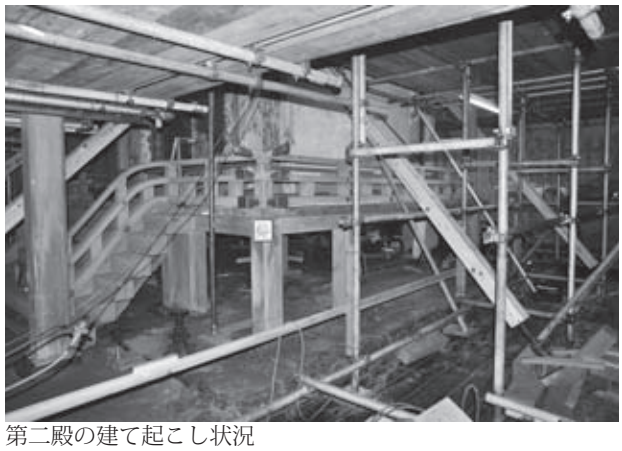


図１　復元の一例

写真２　八丁田圃遺跡　調査区（２区、北から）

重要文化財
丹生都比売神社本殿の保存修理

建 築 年 代：室町時代、江戸時代中期、明治時代
所　在　地：伊都郡かつらぎ町上天野
修理の種類：屋根葺替・部分修理
修 理 期 間：2013.1 ～ 2014.12


第二殿の建て起こし状況

平成 25 年 1 月より開始した当事業は、本年度より本格的に工事が始動し、第一殿、第二殿の檜皮葺き替え、塗装修理と、第二殿の軸部建て起こしを実施した。

修理に先立つ調査により、第二殿の軸部は背面左側が下がっているにも関わらず、正面右側に向かって傾斜していることが判っており、軸部に相当の歪みが生じていることが想定出来た。工事はまず、柱下に鉛板を飼い込んで高さを修正する不陸調整を行い、続いて軸部を押し戻して柱の傾斜を修正する建て起こしを実施した。その後、軸部が元に戻らないように床下部分に筋交いを設置し、構造的な補強を施した。

檜皮屋根は平葺き部分の全面葺き替え及び、軒付の部分的な積み替えを行った。箱棟廻りも腐朽を来した鬼板や千木などの補修を行った。箱棟廻りは前回の昭和 52 年修理時に台湾産檜の非常に目の詰んだ良材で新調されていたが、銅板包みなどの施工に多少の不具合があり、腐朽が進んでいた。また、次年度施工予定の第三殿、第四殿の檜皮葺きに用いるため、神社境内に自生する檜の立木から檜皮の採取を行った。

塗装は前回の文化財修理時にそれまでの色と異なる仕様で塗られていることが判明していたため、建物に残る塗装痕跡の調査や化学分析、史料調査などを行ったところ、これまで判明していなかった、かつての塗装状況が明らかとなった。これを受け、所有者、文化庁、有識者、センターなどで修理方針を協議した結果、古式の姿に戻すこととなった。一方、彩色は江戸末期にかけて何度も手が加えられており、現状の彩色の大半が江戸末から明治のものと想定されるため、かつての彩色を復原することは非常に困難が伴うことと、建物の建立時期が室町時代（2 棟）、江戸時代、明治時代と混在しているため、復原の時代設定自体も困難であることから、彩色は現状のまま修理を行う補筆が予定されていた。しかし、作業を進める中で、前回修理時に使用された剥落止め剤（ビニール系及びシリコン系）の影響か、部材表面から膠が浸透せず、顔料の定着が困難であることが判明。このため、補筆は行わず、代わりに彩色の痕跡を中心に見取り図を作成した。

本殿内にそれぞれ一基安置されている宮殿（附指定）の千木は後世に姑息な修理が為されていたため、形式を整えて新調した。また、漆部分の清拭及び屋根の塗料（緑青）の剥落止めを実施した。

次年度は第三殿、第四殿について今年度と同様に屋根葺き替え、塗装工事を実施する。　（結城　啓司）

第二殿檜皮葺き施工状況

塗装工事施工状況

重要文化財
琴ノ浦温山荘浜座敷ほか 2 棟の保存修理

建 築 年 代：浜座敷、北冠木門（大正時代）、
正門（昭和時代）
所　在　地：海南市船尾
修理の種類：半解体修理、解体修理、部分修理
修 理 期 間：2013.06 ～ 2014.12

修理前の浜座敷を東より見る（背面は矢ノ島）

事業の概要

海南市船尾にある琴ノ浦温山荘園は、工業ベルト製造業で大成した新田長次郎氏（現ニッタ株式会社創業者）により大正年間にわたって造営された別荘である。庭園は、潮入の池の護岸に擬石を多用するなど特徴的で、国の名勝に指定されている。また、主屋や茶室など、園内にある主要な建造物も平成 22 年に国の重要文化財に指定されている。

今回の事業では、浜座敷を中心に正門と北冠木門の計三棟の保存修理を行う計画で、平成 25 年 6 月に着手し、同 26 年 12 月の完成を目指して進めている。また、事業に先立って同 24 年度には、主屋、茶室、浜座敷の 3 棟に対して耐震診断事業も実施されている。

本年度は仮設工事、分解工事を中心として、木材や瓦などの補足材の調達を進めるとともに、各建物で現状変更の申請を行い、次年度実施予定の組立作業や屋根・左官工事、浜座敷の耐震補強工事などに備えた。

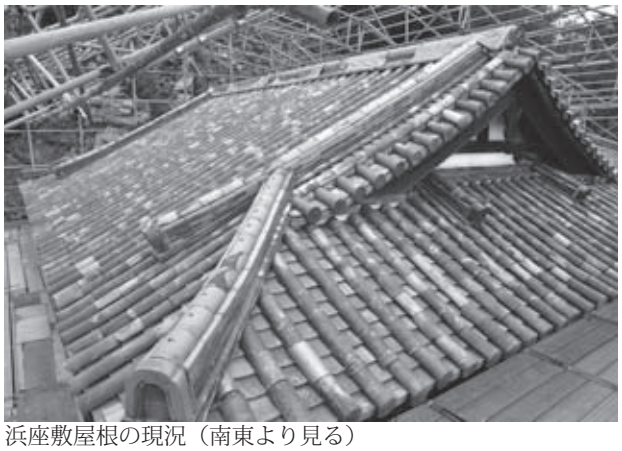
浜座敷

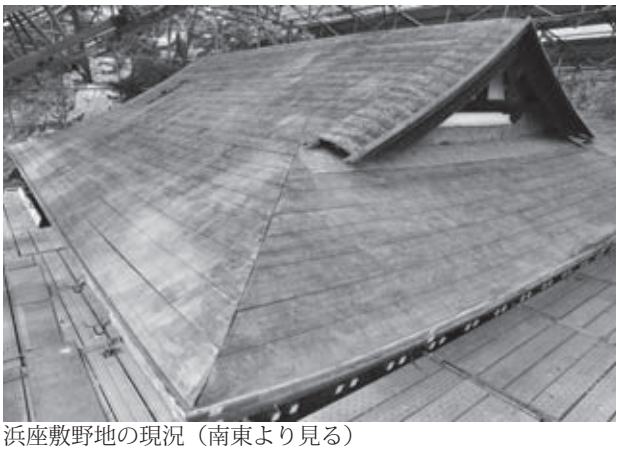
浜座敷は、東西 11.1 メートル、南北 10.9 メートルの平屋建てで、矢ノ島と呼ばれる岩山の斜面へ懸造り状に建てられている。本瓦葺の屋根は、東西に棟をもつ入母屋屋根の北側に寄棟屋根を接続した形式をとる（上写真、表紙左下挿図参照）。今回の修理で、野地の部材に大正 2 年 (1913) 建立当時の墨書が発見され、主屋（同 5 年 (1916) 建築）や茶室（同 9 年 (1920) 建築）に先駆けて建てられた、園内で最初期の建築であることが確認された。

伝統的な外観の中に合板の天井板や小屋組のトラス構造など当時の新しい要素も取り込み、かつては室内から黒江湾が一望でき、海側には船着き場を備えるなど、特徴的な建物である。昭和初期までに建物の西側で一部増改築を受けて来ている。

本年度の修理は、素屋根の建設に始まり、屋根瓦から順に野地や小屋組の分解を計画して取り掛かったが、野地の状態が予想以上に健全であったため（下写真）、木部の分解範囲を見直しながら施工を進めた。

軸部の不陸はほとんど生じていないものの、東面と南面の広縁で軒桁の垂下が著しくなっており、ガラス戸や雨戸など、建具の納まりに支障を来している。今回の修理では、小屋組内部に鉄骨トラスを仕込んで軒桁を吊り込む形式の補強を講じる予定であり、本年度はその準備工事として経年で垂下した軒廻りの補正ま


浜座敷屋根の現況（南東より見る）


浜座敷野地の現況（南東より見る）

北冠木門の修理前全景（西より見る）

でを実施した（巻頭写真 8 参照）。

北冠木門

北冠木門は、柱間 1 間の棟門で袖壁付き、屋根は桟瓦葺（庇部分は銅板葺）。主屋や茶室と同時期の建立とされている。北冠木門でも天井板や軒化粧裏板には合板が用いられている。

柱や軒、小屋組にいたるまで蟻害が進行しており、原形を留めないほどに破損してしまった部材もみられたため、いったん解体した上で修理を行っている。

正門

正門は、古写真より当初は木造であったとみられ、現在の鉄筋コンクリート造の構えは戦前期からになる。また、内側 2 本の主門柱では、鉄製だったものをコンクリートで覆うといった改造がなされている。門扉は戦時中の改変を経て戦後に新調されたものであるが、その意匠は旧来のものに倣っている。

今回の修理では、近年に塗られた門柱のペンキを取り除き、かつての洗い出し仕上げに復旧することと、主門柱上部のガラス装飾の整備を行う。（下津　健太朗）

正門の修理前全景（北より見る）

重要文化財
東照宮唐門ほか 3 棟の保存修理

建 築 年 代：唐門、東西瑞垣、本殿・石の間・拝殿
（元和 7 年・1621）
所　在　地：和歌山市和歌浦西
修理の種類：屋根葺替・部分修理
修 理 期 間：2013.6 ～ 2014.3

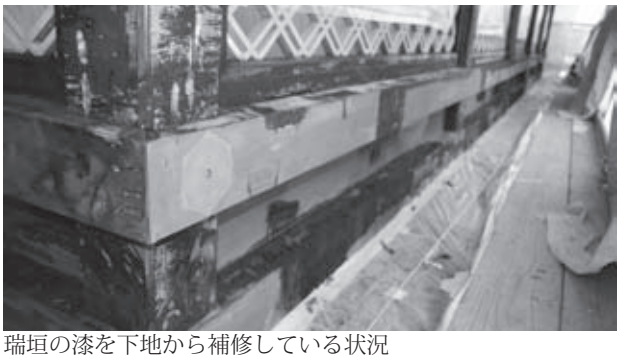
和歌山市和歌浦に位置する東照宮は、徳川家康の十子である紀州藩初代藩主徳川頼宣により建立され、華麗な彫刻や漆塗、彩色が豪勢に施された 7 棟の建物が重要文化財に指定されている。

平成 12 年度には、これら全ての建物の塗装修理や檜皮葺屋根葺替などの事業が実施されたが、唐門や東西瑞垣正面の漆の劣化が進み、一部で割れや剥落が目立ってきたことにあわせ、前回葺替を行わなかった東西瑞垣側面の檜皮屋根の痛みが進んできたことから、拝殿縁廻りの部分的な漆の補修や本殿障壁画剥落部の補彩などを含めて各建物の補修を実施した。

和歌浦湾に臨んだ東照宮では、昭和 54 年の修理事業実施時に、本殿・石の間・拝殿の軒先に塗装や金具の保護を目的とした仮設の庇が設置されており、結果外周の漆塗部分なども比較的良好な状況を保っている。

一方唐門や瑞垣は神域正面の石垣の際に建つ立地条件や建物の性格上塗装保護用の仮設は設けておらず、直射日光や潮風の影響による劣化が顕著となっていた。

繊細な漆を建物外周に施すということは、単に豪壮な建物を建てたということだけではなく、建築後も修理を繰り返すことで、徳川家の威光が永続することを表現することでもあった。現代となり取り巻く背景が変わっても、漆の補修を日光の職人が担当するなど変わらぬ伝統技術で建物は守られている。（多井　忠嗣）


瑞垣の漆を下地から補修している状況

重要文化財
旧西村家住宅の保存活用計画

建 築 年 代：大正 3 年・1914
所　在　地：新宮市春日
事業の種類：保存活用計画執筆
修 理 期 間：2013.4 ～ 2014.3

旧西村家住宅は、文化学院創設者として知られる西村伊作により、自邸として大正 3 年に設計・建設された。平成 22 年に重要文化財に指定されたが、洋館としては和歌山県下において指定第一号である。

新宮駅前本通りから北に入った住宅街に位置し、筋向いには同じく西村の設計による旧宣教師チャップマン邸や、西村の設計事務所所員大嶋虎之助による岡邸が並び、戦前のモダンな気風の街区を形成している。

旧西村家住宅は新宮市の所有となり、内部も含め一般公開施設として活用されているが、経年による建物の傾斜や漏水による木部の腐朽、壁や天井の劣化が散見され、大規模な修理の時期を迎えつつある。

修理に先立ち、文化庁の補助事業として平成 24 ～ 5 年度で建物の保存活用計画を策定し、その第 2 章「保存管理計画」を当文化財センターが執筆担当した。保存活用計画とは、重要文化財に指定された建物を適切に維持管理するとともに、有効に活用するための指針をまとめたもので、実際に建物を管理する人が日常的に利用できるマニュアルとして使用することを意図したものである。

第 2 章では建物の現状での破損状況やその原因を取りまとめ、各部屋の活用上の用途を定めた上で部屋ごとの天井、壁、建具など各部分がオリジナルであるか、途中の改変によるものかなどを区分し、今後修理が必要になった際の取り扱いの指標を定めた。　（多井　忠嗣）

旧西村邸より旧チャップマン邸を見通す

重要文化財 慈尊院弥勒堂の保存修理

建 築 年 代：天文 9 年・1540
所　在　地：伊都郡九度山町慈尊院
修理の種類：屋根葺替・部分修理
修 理 期 間：2013.11 ～ 2013.3

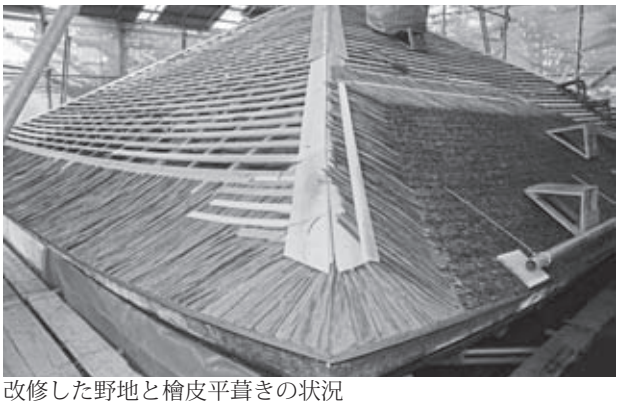
慈尊院弥勒堂は、室町時代後期に建立された方三間の仏堂である。平安時代の弥勒菩薩像（国宝）を安置する内陣部分はさらに古く、鎌倉時代前期に遡る。

平成 5 年に檜皮葺屋根が全面葺き替えされているが、経年による劣化や獣害などが屋根上面で散見されるようになったことに加え、高野山の開創法会を平成 27 年度にひかえることから、寺院による自費修理として屋根葺替と正面板唐戸の補修を実施した。

修理に際しては、国宝本尊に影響が出ないよう建物内部が専門家により養生された上で屋根工事に着手し、あわせて内陣部分の天井裏には、旧檜皮屋根解体後すみやかに仮設屋根を設けるなど、万全を期した。

解体の結果、現状では大きく雨を漏らした部分がなかったこともあり、下地などにも腐朽等はほとんど生じていなかった。しかし中古に小屋組が改変されており、野隅木などに歪みが生じ、小舞下地が姑息な納まりとなっているところも散見された。今回の修理では、小屋組を大きく改修する予定はなかったが、今後の保全も鑑みて、隅部の野地の納まりなどを旧材は可能な限り残したうえで通りが良くなるよう改善した。

正面板唐戸は、昭和初期頃に新調されたものと考えられるが、戸板の幅が縮み、上下の端喰との取り合いで不具合が生じていた。部材への影響を最低限に抑えるために、端喰を一旦解体し、両端を戸板にあわせて調整した上で組み直す補修とした。　（多井　忠嗣）


改修した野地と檜皮平葺きの状況

国史跡　熊野三山史跡等保存整備
～熊野本宮大社神門ほか 4 棟の保存修理～

建 築 年 代：明治時代中期
所　在　地：田辺市本宮町本宮
修理の種類：屋根葺替修理・部分修理
修 理 期 間：2013.05 ～ 2014.03

事業の概要

熊野三山の一つである熊野本宮大社は、明治 22 年（1889）の水害を受けて、同 24 年に大斎原から現在地へ遷座され、境内には流失を免れて移築された第一殿・第二殿、第三殿、第四殿の 3 棟が並ぶ。社殿 3 棟は平成 7 年に国の重要文化財に指定され、境内も平成 14 年に国史跡に指定、平成 16 年にはユネスコの世界遺産にも登録されている。

平成 22 年度・23 年度には社殿 3 棟の檜皮屋根葺き替えを中心とした保存修理工事を実施し、平成 24 年度からは「熊野三山史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業」として、史跡地内の建造物の保存修理工事を進めている。平成 24 年度には神門と築地塀、神饌所の 3 棟で、屋根葺き替えと破損箇所の補修を実施した。

平成 25 年度は、社殿前を囲む鈴門と瑞垣において、屋根葺き替えと破損箇所の補修を実施し、事業期間中には計画変更を行って、鈴門前階段の補修や築地塀の漆喰壁の補修もあわせて実施した。

鈴門・瑞垣

鈴門と瑞垣はいずれも明治遷座時の新築であるが、小屋組の一部には古材が転用されており、瑞垣の長押釘隠し金具にも大斎原からの転用部材が含まれる。

鈴門は 1 間 1 戸の棟門で、屋根は切妻造・檜皮葺。柱は土台の上に据えられるが、戦後に台風で倒壊した際の改修によるもので、それ以前とみられる古写真では基壇石上に直接柱が建てられていた。

瑞垣は鈴門どうしを繋ぎながら社殿をコの字に囲み、延べ 50 間、総長さ 87.88 メートル。屋根は現在檜皮葺だが、明治遷座時は杉の薄板を用いた「こけら葺」であった。戦後の台風で鈴門間の部分が倒壊したのを契機に現在のすがたに改められたものとみられる。

今回の修理では檜皮葺屋根の葺き直しと野地の補修、箱棟銅板包みの補修、土台や柱など軸部下方の木部破損箇所の補修のほか、鈴門では建具の補修や階段石の一部取り替え、瑞垣では破風板・裏甲など軒まわりの補修や長押釘隠し金具の金箔捺し直しなどを行った。

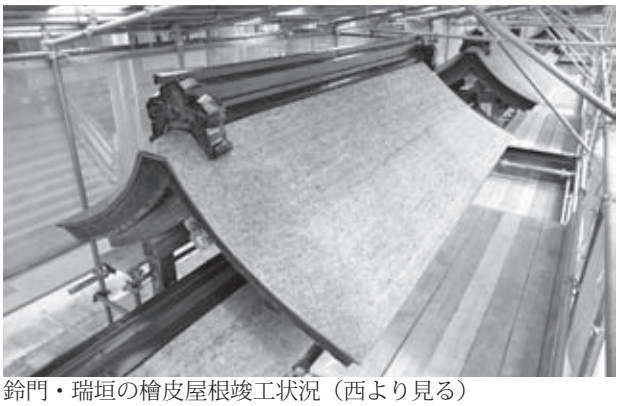
築地塀

前年度に屋根葺き替え修理を行った築地塀では、漆喰壁の破損が進行して来たため、計画の変更を行って漆喰上塗り替えを追加実施した。しかし、施工中に荒壁塗りなど下地の破損も予想以上に進行していることが確認されたため、計画の変更を改めて行い、本年度は工程の関係上、小舞下地の掻き直しと荒壁塗りまでの施工を実施した。

今回の追加修理時に実施した調査の結果、柱や桁の大半が大斎原時代の建物からの転用材と判明した。

今後の予定

世界遺産登録 10 周年にあたる平成 26 年度は、築地塀の壁補修工事を引き続き行い、史跡地内にある建造物の保存修理はひと区切りを迎える。修理の記録は報告書としてまとめ、3 カ年度にわたる整備事業を完了する予定である。　（下津　健太朗）


鈴門・瑞垣の檜皮屋根竣工状況（西より見る）

築地塀の壁下地施工状況（西側を南西より見る）

国史跡 丹生都比売神社境内史跡等保存整備
～若宮・玉垣・玉垣鳥居・木柵の保存修理～

建 築 年 代：明治時代、昭和時代初期
所　在　地：伊都郡かつらぎ町上天野
修理の種類：屋根葺替・部分修理
修 理 期 間：2013.5 ～ 2014.3

若宮の竣工状況

丹生都比売神社では、本殿 4 棟と楼門が建造物として重要文化財に指定されているほか、境内一円が国史跡に指定されている。

本殿 4 棟は平成 25 年 1 月から平成 26 年 12 月までの 24 箇月間の工期にて檜皮屋根葺替及び塗装工事が実施される。本殿の東隣には一間社流れ造、檜皮葺の若宮があり、本殿と若宮が並び建つ壇上の正面側には玉垣が巡らされ、玉垣中央部には鳥居が設けられており、側面及び背面側は木柵が巡らされている。これら本殿以外の建造物も、檜皮の摩耗や塗装の劣化、破損や腐朽が進行していたため、本殿の遷宮に時期を合わせて修理工事を計画し、国史跡並びに県及び町の補助金を得て平成 25 年度に修理工事を実施する運びとなった。

若宮は檜皮屋根の葺き替えと塗装工事、玉垣は銅板屋根の補修と塗装工事、玉垣鳥居は塗装工事、木柵は解体修理工事を行った。工事を進めるなかで、修理に伴う調査により、玉垣の錺金具が当初は鍍金仕上げであったことが判明（現状は黒色塗り）したほか、木柵も現状は黒色塗りであったが、かつては赤色塗りが施されていたことなどが判明した。また、木柵の破損範囲が当初の想定より広範囲に及ぶことが判明し、これらを併せて計画変更申請により工事範囲や仕様の見直し及び工事費の増額を行った。

若宮、玉垣共に現状塗装はペンキ塗りで、赤色の色味は鉛丹調であった。これは、本殿が昭和 52 年に修理された際、その色に合わせて地元の塗装業者が施工したことが、聞き取りにより判明した。この現状塗装を掻き落としたところ、本殿と同じく、酸化鉄系の塗料痕跡が確認できた。今回の本殿修理事業では、軸部の塗装には昭和 52 年に改変される以前の塗料である酸化鉄系塗料を用いることが決まっていたことから、若宮と玉垣の塗装も同様に痕跡の確認出来た酸化鉄系塗料を用いることとした。なお、若宮の軒廻りの塗装に関しては、鉛丹系塗料痕跡が確認出来なかったこと、建立年代が明治期であることなどを併せ、塗り分けは行わずに軸部と同じ酸化鉄系塗料による塗装とした。また、玉垣の格子部分には酸化鉄系の塗装痕跡が検出されなかったことから、本殿での塗り分けを参考に格子部分は鉛丹塗り、柱部分は酸化鉄系で施工した。

本殿修理事業は次年度も施工予定があるが、単年度事業が原則の史跡事業となる本事業は 25 年度にて工事完了した。　（結城　啓司）

玉垣及び玉垣鳥居の竣工状況

木柵の竣工状況

関連研究・資料紹介

平井遺跡で発見された埴輪窯

はじめに

平井遺跡は和歌山市平井に所在し、一般国道２６号第二阪和国道建設に伴い、道路予定地の6,495㎡を対象に発掘調査を行った。埴輪窯は調査地東側の丘陵裾部を掘削中に１号埴輪窯を検出し、調査区外の北側に埴輪窯が延びる可能性や新たな埴輪窯の存在が考えられたため、範囲を追加して調査を行った結果、１号埴輪窯から東に25ｍ離れた場所で２号埴輪窯を検出した。

１号埴輪窯

丘陵に沿って北東から南西方向に延びる形状で、周囲からは排水溝や覆い屋の柱穴などの付帯施設は検出されておらず、上部は後世の削平を受けており、煙道部は残存していない。窯壁には粘土の貼り付けなどはないが、被熱により焼けた痕跡が明瞭に残存している。焼成部の深さは約0.3ｍで床面の傾斜角度は約28°である。焼成部内部の堆積状況から３回程度にわたる焼成がおこなわれた可能性が考えられる。内部から出土した埴輪は、土師質の円筒埴輪の他、石見型埴輪、蓋形埴輪などの形象埴輪も含まれている。

２号埴輪窯

丘陵に沿って北東から南西方向に延びる形状で、周囲からは排水溝や覆い屋の柱穴などの付帯施設は検出されておらず、上部は後世の削平を受けており、煙道部は残存しない。窯壁には粘土の貼り付けなどはないが、被熱により焼けた痕跡が明瞭に残存しており、残存状態も良好である。焼成部の深さは約0.6ｍで床面の傾斜角度は約23°である。焼成部内部の堆積状況から６回程度にわたる焼成がおこなわれた可能性が考えられる。内部から出土した埴輪は、一部須恵質のものもみられるが、土師質の円筒埴輪が中心であり、横向きに並べて置かれていたため、床面に据えて焼台として利用されていたと考えられる。朝顔形埴輪や家形埴輪、馬形埴輪などの形象埴輪も出土している。

埴輪窯の周囲について

今回調査が行われた平井遺跡の調査範囲北側にある丘陵上において前方後円墳が新たに発見された（平井１号墳）。墳丘採集資料より、円筒埴輪や石見型埴輪、馬形埴輪、家形埴輪、蓋形埴輪などが立て並べられていた可能性が推定され、築造年代は６世紀代と考えられる。なお、２号埴輪窯の南東側の包含層から多くの埴輪が出土しており、埴輪窯や平井１号墳との関連が考えられる。円筒埴輪が多いが、石見型埴輪、馬形埴輪、家形埴輪、人物埴輪、蓋形埴輪、胡籙形埴輪、双脚輪状文埴輪などの形象埴輪もみられる。古墳と埴輪窯がほぼ同時期である可能性が考えられることから、埴輪

２号埴輪窯　床面１　焼成部（南東から）

１号埴輪窯　床面３　全景（西から）

２号埴輪窯　床面１　灰原（東から）

の受給関係などが推測される。埴輪窯の時期は、整理作業が終了していないため確定できないが、５世紀までさかのぼる可能性も考えられるとの専門家の意見もあることから、大谷古墳との関係も推測することができる。包含層出土の埴輪には、従来紀ノ川南岸でのみ出土していた胡籙形埴輪、双脚輪状文埴輪なども含まれており、岩橋千塚古墳群との関係が考えられる。今後の整理作業によって検討が必要な点である。

埴輪窯の評価

平井遺跡の埴輪窯は、和歌山県内で初めて埴輪窯が発掘調査された事例である。また、従来から知られていたわけではなく、新発見の埴輪窯である。和歌山県では和歌山市森小手穂（もりおてぼ）埴輪窯跡が従来から知られていたが、本格的な調査は行われておらず、全容は不明である。近畿地方では大阪府高槻市の新池（しんいけ）遺跡や奈良県奈良市の菅原東（すがわらひがし）遺跡などが埴輪窯の調査例として広く知られているが、須恵器窯などに比べて発掘調査例は少ない。これは埴輪窯の立地に適した丘陵裾部の発掘調査例が少ないためではないかと考えられる。

従来の研究では、古墳時代における紀ノ川北岸の勢力と南岸の勢力との関係について、５世紀に大谷古墳や車駕之古址古墳といった大型の前方後円墳を造った紀ノ川北岸の紀臣（きのおみ）系の勢力から、６世紀に入って大型の前方後円墳が造られた岩橋千塚古墳群のある南岸の紀直（きのあたえ）系の勢力に権力の中心が移ると考えられている。しかし、紀ノ川北岸にある平井遺跡において紀ノ川南岸の埴輪の特徴である、結晶片岩を含む埴輪も出土していることから、埴輪の生産に関わった工人の移動や埴輪自体の移動を検討するとともに、紀ノ川南岸勢力の影響力が紀ノ川北岸に及んだ可能性も考えられるなど、従来の研究を再考しなければならない成果が得られた。

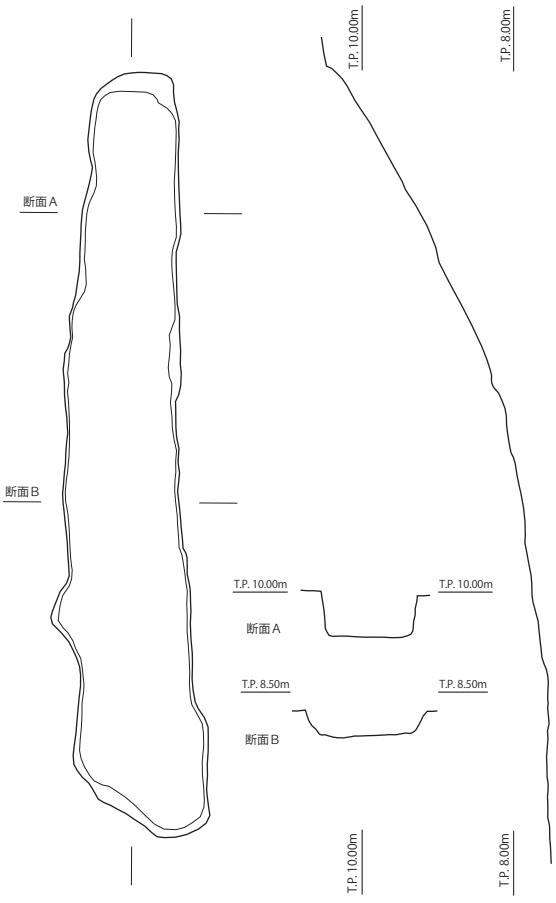
また、埴輪窯出土の埴輪は、生産地が特定されるため、供給先（古墳出土の埴輪）がわかれば関連性の解明につながる手がかりを得ることができる。

出土した埴輪の整理はこれからであるが、紀伊における埴輪生産や古墳の展開過程、地域の勢力関係を解明する上で、非常に重要な発見といえる。（山本　光俊）

	１号埴輪窯	２号埴輪窯
全長（灰原含む）	7.0 m以上	10.0 m以上
煙突	未確認	未確認
焼成部長さ	約 2.0 m	約 4.5 m
燃焼部長さ	約 1.0 m	約 1.0 m
窯本体幅	約 1.2 m	1.1 ～ 1.5 m
焼成回数	３回	６回
灰原長さ	4.0 m以上	4.5 m以上
灰原幅	最大約 3.0 m	約 1.5 mの掘り込み

埴輪窯の規模比較表

２号埴輪窯　床面５　焼成部（南から）



２号埴輪窯実測図（S ＝ 1/100）

弥生土器の搬入と臨地生産
―神前遺跡出土土器の胎土分析成果から―

神前遺跡の立地と地勢

神前遺跡は旧紀ノ川と和田川に挟まれた標高１～２mの沖積地にある集落・生産遺跡であり、溝からは多数の弥生土器が出土している。

紀ノ川南岸は三波川帯の結晶片岩類を主とする山地を形成しており、和田川はこの山地の水を集め、神前遺跡の南側を流れている。神前遺跡北東の福飯ヶ峯では風化の進んだ結晶片岩が露頭する。

一方、紀ノ川北岸の和泉山地は和泉層群の砂岩・泥岩類を中心に形成されており、神前遺跡西側の旧紀ノ川河口部付近では南岸と北岸の双方に由来する岩石類を含む粘土や砂粒が採取できるものと考えられた。

そこで発掘調査報告書作成時に、森岡秀人氏と㈱パレオ・ラボの藤根久氏の協力を得て産地推定と胎土分析を行ったが、ここではその成果をもとに、神前遺跡における人と土器の流れについてまとめておく。

神前遺跡の在地土器

神前遺跡で圧倒的多数を占めるのが、胎土に片岩を含む在地の土器である。片岩とともに砂岩・泥岩・石英長石類・多結晶石英・酸化鉄結核を含む土器も多い。植物珪酸体・雲母は量が多いものと少ないものがあり、カリ長石・輝石類・角閃石類・火山ガラス・チャートは微量含まれている。

在地の土器は大きく二種類に区分できる。片岩が突出して多く、砂岩等を含まない胎土は、和田川沿いの粘土を採取して、片岩を混和材として用いた土器と推定される。一方、砂岩・泥岩が多くチャート等を含む粘土は、遺跡西側の旧紀ノ川沿いで粘土を採取し、混和材として川砂と片岩を入れたものと考えられる。

搬入された弥生土器

神前遺跡では片岩を全く含まない土器も散見される。１は頸部と肩部に段をもつ前期中段階の遠賀川式の壺で、胎土にはカリ長石・酸化鉄結核・砂岩・泥岩・流紋岩等が含まれている。２は瀬戸内系の逆Ｌ字状口縁をもつ鉢で、淡水性の粘土を基質として泥岩・火山ガラスを含んでいる。３は円形浮紋を頸部に直列させた広口壺片で、淡水性の粘土を用い、流紋岩・砂岩とバブル型火山ガラスを含んでおり播磨の土器とみられる。４は縄文時代晩期か弥生時代前期の突帯文系土器深鉢の破片で、深成岩類（生駒斑れい岩）・角閃石類を含む断層ガウジと呼ばれる特徴的な土を用いた生駒山西麓産の土器である。なお、この土器片にはイネとキビの種実圧痕が確認されている。５は付加条沈線の間を、ヘラを束ねたクシ状工具で施紋する弥生時代前期から中期への移行期の広口壺である。大阪層群に由来する海成粘土を基質とし、深成岩類・砂岩・泥岩を含んでいる。６は頸部にヘラ描き沈線紋を施す広口壺で、深成岩類・雲母・火山ガラスを含んでおり、紀ノ川上流かその支流の橋本川の土器と推定されている。

１～６の土器は瀬戸内・大阪平野・紀ノ川上流域から搬入されたものと理解される。

紀伊における臨地生産土器

紀伊以外の地域の形態的特徴をもつが、胎土に片岩を含む紀伊（神前遺跡周辺）で製作したとみられる「臨地生産土器」が若干数確認される。

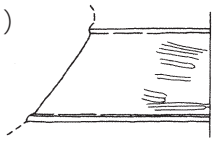
７は１より若干新しい様相を示す遠賀川系の広口壺である。８・９は逆Ｌ字状口縁をもつ甕ないし鉢で、10・11は口縁内面に突帯を貼りつける阿方式と呼ばれる広口壺である。これらは瀬戸内地域の特徴であり、紀伊では基本的にみられない特徴である。12は河内地域に特徴的な折れ曲がった口縁をもつ中期の甕である。これらの土器の胎土には片岩が含まれており、瀬戸内海沿岸や河内の人が神前遺跡周辺に来て土器を作ったものと考えるのが妥当であろう。

紀ノ川河口部での弥生文化の始まり

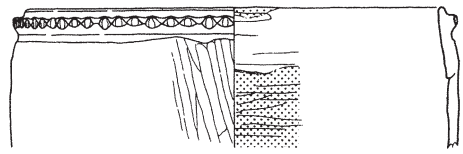
１の遠賀川式土器は北部九州からの弥生文化の到達を示す土器であり、４の突帯文系土器は縄文時代晩期から続く生活の中に農耕が根付き始めたことを示す土器である。これらの土器とともに紀ノ川河口部へ農耕文化がもたらされたのであろう。

神前遺跡では弥生時代前期から中期にかけて瀬戸内と大阪平野、紀ノ川上流域からの土器の搬入とともに人の移動も確認でき、地域間交流により農耕の定着が支えられていた様子がうかがえる。　（丹野　拓）

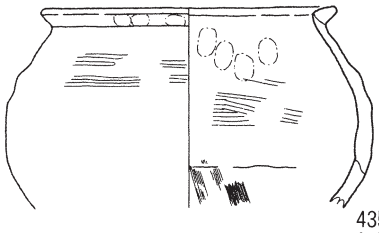
搬入品（1～6）



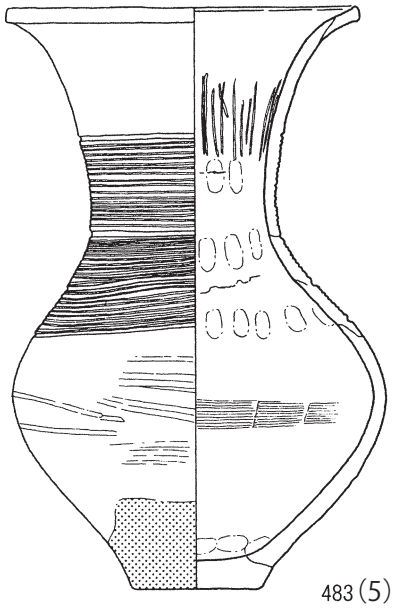
380 (1)



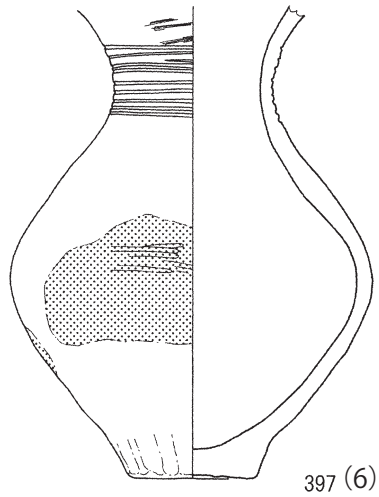
434(4)



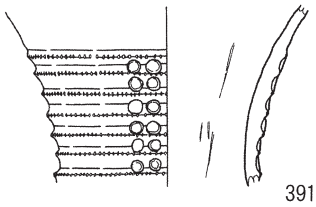
435
(2)



483 (5)

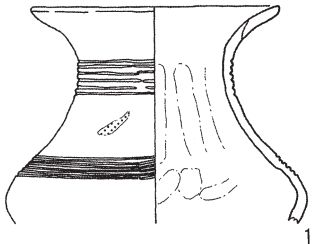


397 (6)

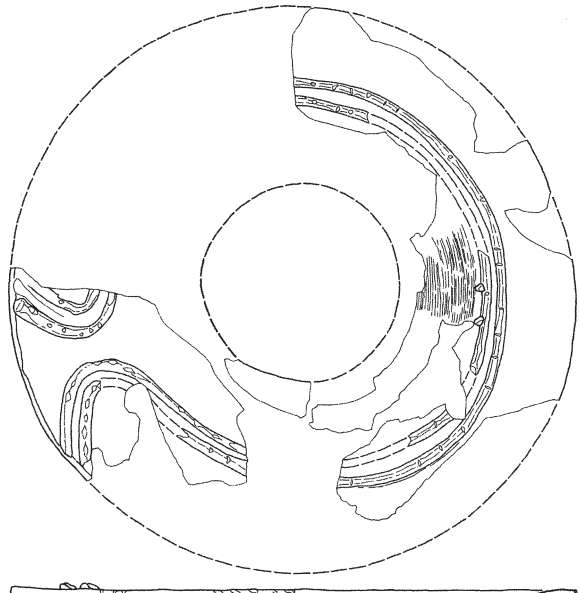


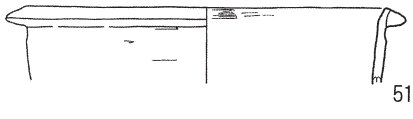
391
(3)

臨地生産品（7～12）

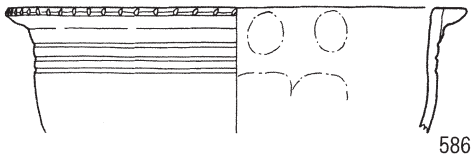


1042 (7)

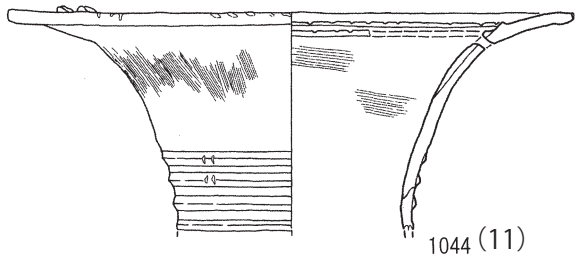




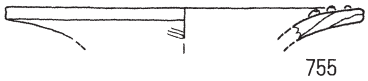
519 (8)



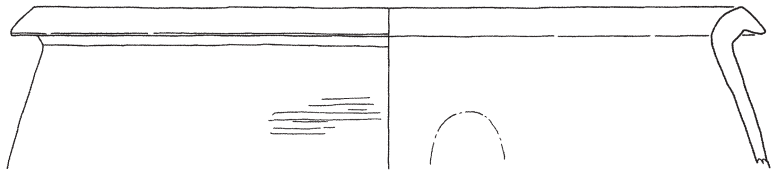
586
(9)



1044 (11)



755
(10)



774
(12)

0 10 20 cm

双脚輪状紋形埴輪と胡籙形埴輪の新資料
―平井遺跡出土例について―

はじめに

平井遺跡の発掘調査では多数の特徴的な埴輪が出土し、筆者も形象埴輪の検討等のために何度か呼んでいただいた。ここではそのうち岩橋千塚に分布の中心がある二種類の埴輪について紹介する。

これらの埴輪は岩橋千塚を含む紀ノ川南岸の埴輪に特徴的な結晶片岩と石英の粒を胎土中に多数含むもので、平井遺跡の埴輪窯から出土した埴輪とは胎土の特徴が異なっている。出土地点は窯の灰原より東側、平井１号墳の南側の埴輪・土器溜りである。

双脚輪状紋形埴輪

双脚輪状紋形埴輪は、岩橋千塚の大日山 35 号墳でこれを冠帽としてかぶった人物埴輪が出土したことから、輪状の鍔と双脚部のある冠帽を表現した埴輪であることが判明している。鍔の外側の輪郭は連弧状を呈し、後頭部に屈曲した双脚部が付く。

１・２は双脚部の破片（２個体分）、３は輪状部の破片である。埴輪の片面の輪郭に沿って、二又の工具で併行沈線をひき、刺突を施す。放射状の併行沈線が連弧の端部からずれ、補助的な併行沈線が施されており、双脚輪状紋形埴輪の中ではやや新しい様相をもつ。

平井遺跡出土　双脚輪状紋形埴輪

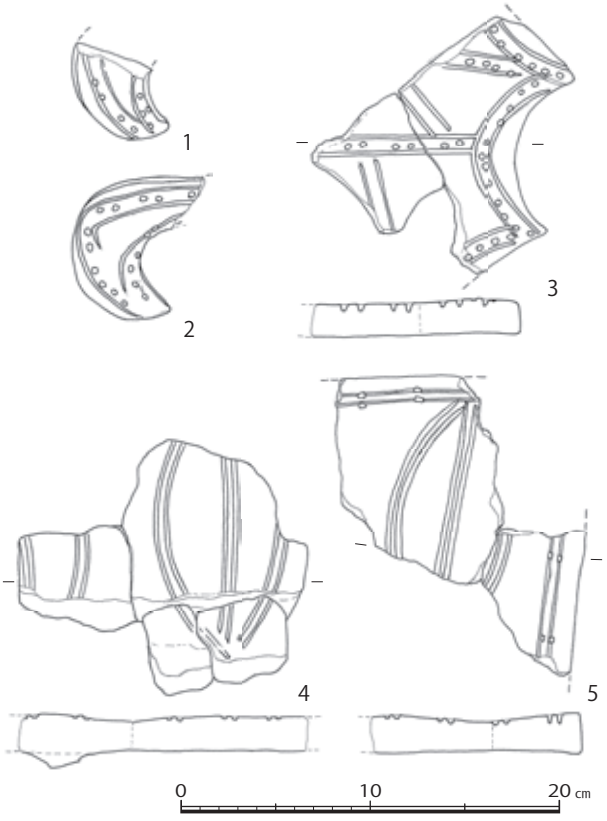
胡籙形埴輪

胡籙形埴輪は矢羽根を上にして腰に装着する矢入れ具の埴輪である。４・５は併行沈線で矢羽根が表現される。４は裏面に突帯状の補強粘土があり、５は上端と右側に釣金具や帯金具に相当する表現が確認できる。岩橋千塚出土例と比べると矢羽根の間隔があく。このほか矢筒部分とみられる破片等も出土している。

平井遺跡出土　胡籙形埴輪

まとめ

双脚輪状紋形埴輪は２個体以上あり、胡籙形埴輪も複数個体の破片と推定される。管見では双脚輪状紋形埴輪は 12 遺跡目（冠帽を含むと 13 遺跡目）、胡籙形埴輪は４遺跡目（曖昧な資料を含むと７遺跡目）の資料で、これらは６世紀前半に紀ノ川南岸から搬入された遺物と考えられる。　（丹野　拓）



平井遺跡の双脚輪状紋形埴輪と胡籙形埴輪

重要文化財丹生都比売神社本殿保存修理工事
―塗装工事における新発見―

はじめに

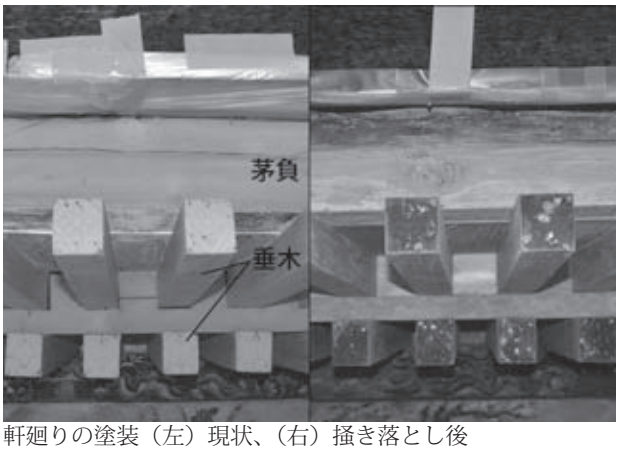
現在実施中の丹生都比売神社本殿保存修理工事において、塗装工事を実施する際に非常に大きな発見があったので、ここで報告する。

塗装の現状

本殿の保存修理工事は昭和 52 年に、今回と同様檜皮葺き替え、塗装修理が行われている。その際の工事関係者による証言より、当時の塗装工事は旧来の仕様を踏襲せず、大きく改変されていることが知られていた。具体的には、赤色塗装が酸化鉄系塗料（丹土または弁柄）から鉛丹への変更、縁板及び垂木小口が黒色塗装から黄土塗装への変更、破風眉が緑青塗装から黒色塗装への変更などであった。

塗装の調査

そこで、修理方針を検討するための資料として、赤色塗装部分の内、現状塗装及び前回より前の塗装（工事着手前で足場がないため主に縁下の軸部などで前回塗装されていない箇所）について蛍光Ｘ線による成分分析を行い、塗装を構成する元素を調べた。その結果、前回の塗装からは主に鉛が検出された一方、前回より前の塗装から鉛は全く検出されず、主成分として鉄が検出された。つまり、軸部塗装に鉛丹が用いられたのは前回修理時が初めてで、それまでは酸化鉄系塗料が用いられていたことになる。この知見と聞き取りによる情報を前提に、工事着手後に塗装の掻き落としを行いながら前回の修理以前の塗装状況について、塗装痕跡を元に検証した。その結果、赤色塗料痕跡は色味から明らかに酸化鉄系で、縁板及び垂木木口と茅負上段は黒色塗装痕跡がはっきりと見て取れた。これらの結果は前述の証言と矛盾がなかった。また、酸化鉄系塗料の色味を検討する手掛かりとしては、蟇股上巻斗が桁に取り付く部分にほぼ劣化のない塗料が残存していた他、第二殿小屋内の部材に明治期に化粧垂木が転用されており、その表面に残存する酸化鉄系塗料が参考となった。



軒廻りの塗装（左）現状、（右）掻き落とし後

前回修理の経緯

木階や縁板の木口を黒く塗る例は全国的には一般的とは言えないが、紀北地方に分布する神社で少なからず実例が確認されていることから、この地域の特色と言えるだろう。また、垂木の木口には金箔押しの透かし金具が取り付くことから、金具の背景に見える塗装は同系色の黄色よりも黒色の方がより金具を引き立てることを考えると、垂木木口を黒色で塗ることはとても理にかなっている。

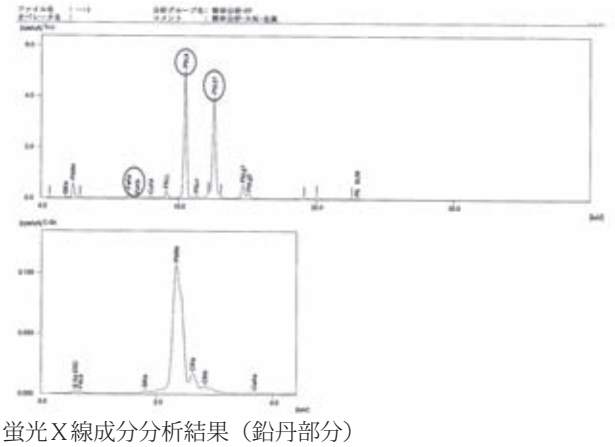
そして残念なことであるが、この時期の文化財修理ではこのように塗装の仕様が変更された例は少なからず認められる。当時は、「木口は黄色」「神社には鉛丹」を用いるという考えが一般的で、そこから外れたものは異質で是正すべきと考えられていた節があり、最近の研究ではかつては建築の塗装に鉛丹を使用する例はあまりなく、ほとんどが酸化鉄系塗料であったこと、また、鉛丹が神社建築に多用されるようになった背景には、平安神宮（鉛丹塗り、明治 28 年・1895 完成）が神社のイメージとして人々に定着したから、といった研究結果も報告されている。

つまり、前回の変更は時流に乗った仕様変更であり、そこには地域の特色を尊重する意識が希薄であったと言える。ただし、同様の事例は全国的に数多あり、当時としては一般的な事例とも言えるだろう。

新たな発見

このように塗装の変遷を確認する作業のなかで、正面千鳥破風内側の垂木足元に灰茶褐色の塗料痕跡を発見した。この特徴的な色は、長い年月の間に変色した鉛丹と推測でき、このことは前回の修理以前は全体が

旧鉛丹塗料発見位置（丸囲み部）


蛍光Ｘ線成分分析結果（鉛丹部分）

酸化鉄系塗料で塗られていたとする想定から逸脱した、大きな発見であった。この発見を受け、他の場所で同様の塗料が残存していないか、慎重に調査を行った。その結果、垂木のごく一部に同様の塗料が残存していることや、桁の巻斗下にあたる部分及び前述の小屋裏に転用された化粧垂木の表面塗装（酸化鉄系塗料）の下にも鉛丹色の塗料が確認できた。しかし一方で、軸部に関してはこれまでと同様で、鉛丹と思われる塗装痕跡は発見できなかった。

新たに発見された鉛丹と推測される塗料について、蛍光Ｘ線分析を実施したところ、全て鉛を主成分とすることが判り、推測通り鉛丹であることが確実となった。これにより、軒廻りは鉛丹塗りで、軸部は酸化鉄系塗料と、塗り分けが行われていたと推定できる。また塗装の状況より、塗り分けは第一殿の建立当初の正徳５年（1715）には少なくとも行われており、遅くとも明治期には軒廻りを含めて全て酸化鉄系塗料に変更されていると想定できた。

実例と理由

以上のように、今回の塗装工事に伴う調査によって、江戸期には軒廻りと軸部で赤色塗料を塗り分けていたという、新たな知見を得ることができた。そこで問題となるのが、はたしてこのような例が実在するのか、という点である。調べてみたところ県内では海南市の藤白神社本殿（寛文３年・1663）に同様の塗り分けが施されているほか、全国では浅草寺の二天門（慶安２年・1649 頃）は軒廻りを鉛丹、軸部を赤漆に塗り分けていたことが近年の修理工事で判明しており、多数とはいかないまでも数例が確認できた。つまり、軒廻りと軸部で異なる塗料（色）を塗り分ける例は確かに存在し、在り得ないことではないのだ。

次に、何故赤色塗装を二色で塗り分けるのか？という疑問が生じる。これに対する明確な答えはないが、考察する手掛かりとして塗料の性質が挙げられる。鉛丹の主原料となる四酸化三鉛は自然界で不安定な物質で、日光（紫外線）や湿気（水）の影響を受けて白色や黒色に変質し易い一方、酸化鉄（酸化第二鉄）は非常に安定的な物質で変色し難い。これこそ、かつては鉛丹でなく酸化鉄系塗料が建築塗装で主に用いられてきた理由と考えられている。そして、軒廻りは直射日光に当たりにくく、地面から一定の距離があるため湿度も安定しており比較的変色が起こりにくいことを考えると、軒廻りに鉛丹を用いることは非常に理に適っていると言える。

まとめ

これらの調査結果を踏まえ、今回の塗装をどのような仕様とするのか、所有者をはじめ、文化庁、有識者、センターなどを交えて何度も協議を重ねた。その結果、前回修理での変更は歴史的な裏付けがなく、地域の歴史や特色が重要視されなかったものと判断し、本来の塗装に戻すことを今回の修理方針とした。また、調査により解明した塗り分けの実態は全国的にも稀少な事例であり、神社にとってもより古式で元来の仕様と捉え、実際の施工ではこれらの成果を反映した塗装を実施することとなった。

修理によって本来の価値を失する（負の）可能性があることと、調査によって埋もれた過去を掘り起こせる可能性があることの、両方の可能性について今回の調査を通じて痛感した。　（結城　啓司）

平成 25 年度の普及啓発事業

埋蔵文化財に関する普及事業
シンポジウム・報告会
　和歌山県内文化財調査報告会「地宝のひびき」
　公開シンポジウム「紀ノ川北岸の古墳文化
　－初期須恵器・埴輪・陶棺からみた地域の歴史－」
現地見学会
　「歩いて知るきのくに歴史探訪
　～竈山神社と周辺の遺跡をめぐる～」
発掘調査現地説明会
　「和田遺跡（第２次）、平井・平井Ⅱ遺跡（第２次）、小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡、和歌山城跡、東渋田遺跡」
出前授業　「和歌山市立川永小学校」
既刊報告書の電子書籍化
文化財建造物に関する普及事業
　「見て知る伝統技術」
　「ヘリテージマネージャー養成講習会」

埋蔵文化財に関する普及事業

平成 25 年度の普及啓発事業として埋蔵文化財関係では 11 件の事業を実施した。シンポジウム、報告会、現地見学会は国庫補助金を受けて和歌山市で実施した。県内の各発掘調査現場において随時実施して現地説明会・現地公開を実施した。

情報誌「風車」の刊行の他、各事業において資料集やマップ等を作成し、参加者及び周辺自治体、研究機関等に配布し、好評を得た。

文化財調査報告会　「地宝のひびき」

平成 25 年 9 月 1 日に和歌山県立図書館（きのくに志学館）２階講義・研修室において、前年度の県内発掘調査の成果を県民の皆様に知って頂くため、調査成果報告会と題して開催した。発表は、「近年の和歌山県内の発掘調査」田中元浩氏（和歌山県教育委員会）、「有間皇子墓の有力地から発見された副葬品」前田和彦氏（御坊市教育委員会）、「熊野信仰のかたち」小林高太氏（新宮市教育委員会）、「地震痕跡と水田状遺構」藤藪勝則氏（（公財）和歌山市文化スポーツ振興財団）、「初期須恵器が発見された遺跡」井石好裕（当センター）であった。また併設イベントとして、出土遺物のミニ展示、刊行物の展示及び配布等も行なった。参加者数 90 名であった。

「地宝のひびき」発表風景　田中元治氏

公開シンポジウム　「紀ノ川北岸の古墳文化」

国道 26 号第二阪和国道建設に伴い平井遺跡・平井Ⅱ遺跡において大規模な発掘調査が行われた。調査成果を速報的に紹介する為、平成 26 年 2 月 1 日に和歌山県立図書館（きのくに志学館）２階講義・研修室で開催した。滋賀県立大学の定森秀夫氏に「紀伊の渡来文化－初期須恵器を中心に－」と題して講演をいただいた。その他の発表は、「平井遺跡周辺の調査成果」中村淳磯（当センター）、「紀ノ川北岸の埴輪」藤藪勝

地宝のひびき風景

公開シンポジウム「紀ノ川北岸の古墳文化」発表風景

則氏（(公財）和歌山市文化スポーツ振興財団)、「和歌山県出土の陶棺」川口修実氏（有田川町教育委員会）の３本があった。その後「紀ノ川北岸の古墳文化について」と題し各専門分野からの意見をいただきシンポジウムを行った。

また、平井遺跡・平井Ⅱ遺跡出土の遺物や和歌山市教育委員会所蔵の遺物の借用を受け展示を行った。参加者数は 128 名であった。

講演　定森 秀夫氏

シンポジウム風景

楠見遺跡出土初期須恵器　器台（和歌山市教育委員会所蔵）及び平井Ⅱ遺跡出土初期須恵器　遺物見学風景

歩いて知るきのくに歴史探訪
～竈山神社と周辺の遺跡をめぐる～

平成 25 年 10 月 26 日に「歩いて知るきのくに歴史探訪～竈山神社と周辺の遺跡をめぐる～」を開催した。竈山神社と周辺の遺跡等について解説したマップを片手に歩きながら見学を行った。また、竈山神社宮司の吉良義章氏の案内により竈山神社・彦五瀬命竈山墓の見学も行った。台風の通過後で風が強かったものの、101 名の参加があった。

歩いて知るきのくに歴史探訪　竈山神社境内見学風景

発掘調査現地説明会

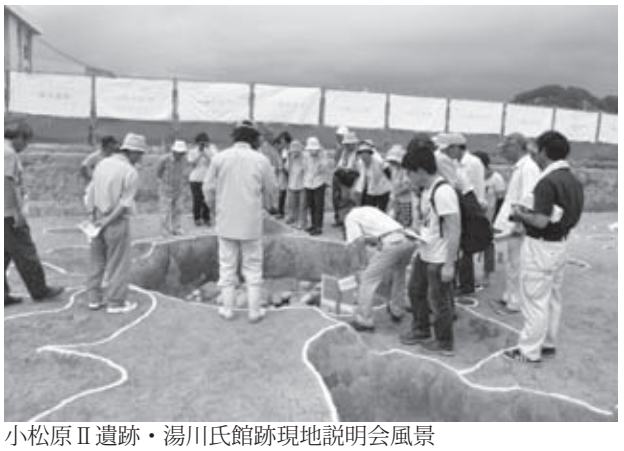
遺跡の発掘調査成果を広く一般の方々に周知するため、発掘調査の現地説明会・現地公開を開催した。

各現場の発掘調査担当者による遺跡の解説のほか、出土遺物の展示等を行い、地元の方を中心に多数の参加者を得ることができた。現地説明会・現地公開を開催した遺跡は以下の通りである。

和田遺跡（８月 24 日)、小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡（８月 31 日・11 月７日)、平井遺跡・平井Ⅱ遺跡（12 月 21)、和歌山城跡（12 月７日)、平井遺跡・平井Ⅱ遺跡（2 月 23 日)、東渋田遺跡（９月 21 日)。

和田遺跡現地公開　遺物見学風景

また、平井遺跡・平井Ⅱ遺跡は和歌山市立平井小学校の生徒、小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡では御坊市立藤田小学校・湯川小学校の児童及び教員を対象とした現地説明会を開催し、遺跡の説明や検出された遺構の解説等を行った。


小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡現地説明会風景

小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡現地説明会　遺物見学風景

出前授業　「和歌山市立川永小学校」

平成 25 年 5 月 31 日に和歌山市立川永小学校で 6 年生を対象に出前授業を行った。

授業では、小学校周辺の遺跡や地元の歴史を紹介し、実際に土器を手にとって観察などの授業を行った。また発掘調査を行う理由や、調査を行うことで分かってくること等について解説・説明を行った。

既刊報告書の電子書籍化

平成 23 年度より、公益財団法人和歌山県文化財センター及び財団法人和歌山県文化財センターで過去に刊行した発掘調査報告書の公開・活用促進を目的として既刊報告書の電子書籍化を行っている。今年度は 1995 年から 2005 年までの和歌山県文化財センターが編集・発行した報告書 28 冊を対象として実施した。

平井遺跡・平井Ⅱ遺跡現地説明会風景

平井遺跡・平井Ⅱ遺跡現地説明会風景

和歌山城跡現地説明会風景

東渋田遺跡現地説明会風景

文化財建造物に関する普及事業

平成 25 年度は、丹生都比売神社や琴ノ浦温山荘園の保存修理現場において、求めに応じて現場見学会等の開催に協力した。

「見て知る伝統技術」

平成 25 年 8 月 25 日に丹生都比売神社保存修理現場にて、財団法人和歌山県文化財保護協会の主催（当センターは共催）による現場見学会「見て知る伝統技術」が実施された。

当日はあいにくの天候だったが 24 名の参加があり、2 班に分けて素屋根内での見学と資材置き場での取り外した部材などの解説を行った。

素屋根内では、各社殿の木部に施された塗装のケレン（掻き落とし）を実施した状況で、現状と異なる塗装の痕跡などを中心に、伝統的な塗装の手法や今回判明した新発見なども併せて紹介した。また、併せて施工を進めていた檜皮屋根の葺き替えに関し、使用されている檜皮材や竹釘の製法や葺き方に関しての説明を行った。

資材置き場では、今回の修理に伴い一旦建物から取り外した蟇股（彫刻の入った装飾的な部材）を並べ、間近で見学してもらった。仏教に係わるモチーフなども多用されており、丹生都比売神社の高野山との深いつながりを理解してもらうとともに、裏面に施された墨書により、建物の改変の歴史がわかることなどを解説した。

「ヘリテージマネージャー養成講習会」

県内の歴史的建造物の保護推進事業の一つとして、平成 25 年度より和歌山県でも「ヘリテージマネージャー養成講習会」の実施が始まった。この事業は、文化庁の「文化芸術振興費補助金（文化遺産を活かした地域活性化事業）」の補助を受けて実施され、当センターでも講習会において歴史的建造物保存にかかわる講義や演習を実施した。

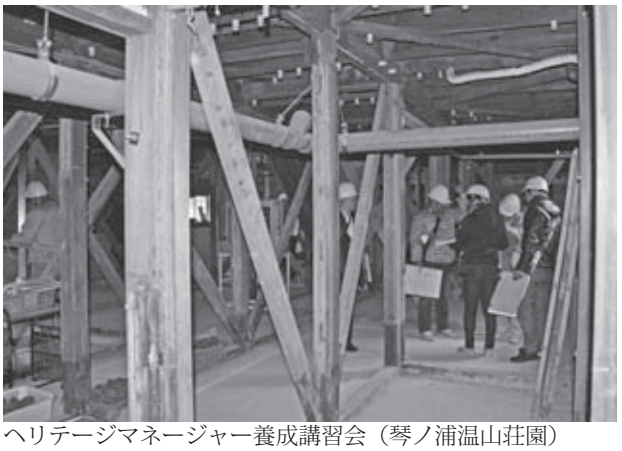
平成 25 年 10 月 12 日には、「伝統的建造物の構法と技法」の講義を実施し、日本建築史の概説として、県内の指定文化財建造物の事例を中心に、時代ごとの建物の特徴等に関し解説した。

同 12 月 13 日には「文化財建造物の修復」と題した講義を実施した。平成 19 年度に竣工した重要文化財福勝寺本堂・求聞持堂（海南市下津町）の修理記録を中心に、文化財建造物の修理手法の基本を紹介するとともに、近代和風、洋館、耐震補強や災害復旧など、今後対応の機会が増えてくる見込みの事例を紹介し、文化財建造物の範疇が広がっていることを説明した。

平成 26 年 2 月 1 日には琴ノ浦温山荘園において、園内の重要文化財建造物の見学・実地演習を開催した。

見学においては、園内の 3 棟の重要文化財建造物を中心に、近代和風建築の特徴や今後の修理計画等に関する解説を行った。実地演習は、主屋地階の各区画をグループ分けし、内装が撤去されている現状を講習生自身が調査して復原考察を行い、修理計画を立案して班ごとに発表する、というより実践的な演習を実施し、適宜調査方法の指導や考察事項への助言を行った。

現場見学会「見て知る伝統技術」（丹生都比売神社）


ヘリテージマネージャー養成講習会（琴ノ浦温山荘園）

（公財）和歌山県文化財センター平成 25（2013）年度概要

Ⅰ　受託業務

埋蔵文化財発掘調査等受託業務	9 件
埋蔵文化財遺物整理等受託業務	5 件
文化財建造物保存修理技術指導等	13 件

Ⅱ　理事会・調査委員会・会議など

理事会・評議員会

理事会	25.06.06	アバローム紀の国
評議員会	25.06.25	アバローム紀の国
理事会	25.11.14	アバローム紀の国
理事会	26.03.24	アバローム紀の国

調査委員会

26.02.13･14　平井・平井Ⅱ遺跡発掘調査、和歌山城跡発掘調査、近畿自動車道紀勢線遺跡出土遺物等整理

調査指導

埴輪窯及び埴輪について	大阪大谷大学：犬木　努	26.02.10	平井遺跡
	奈良文化財研究所：廣瀬　覚	26.02.12	平井遺跡
	大阪大学大学院：福永伸哉	26.02.20	平井遺跡
弥生土器の産地・年代について	日本考古学協会：森岡秀人	25.08.07	神前遺跡第 2 次整理業務
中世末期から近世初頭の陶磁器の産地・年代について	大阪城天守閣：松尾信裕	25.12.12	神前遺跡第 2 次整理業務

埋蔵文化財関係

全国埋蔵文化財法人連絡協議会関係

第 34 回全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会	25.06.20、21	主催：（公財）滋賀県文化財保護協会
平成 25 年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会	25.11.21、22	主催：（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

近畿ブロック主担者会議等

平成 25 年度第 1 回(第 47 回)全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議	25.06.28	主催：大阪市博物館協会
第 19 回近畿ブロック埋蔵文化財研修会	25.11.22	主催：大阪府文化財センター
平成 25 年度第 2 回(第 48 回)全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議	26.02.14	主催：枚方市文化財研究調査会
平成 25 年度第 1 回全埋協近畿地区コンピュータ等研究委員会	25.06.26	主催：（公財）長岡京市埋蔵文化財センター
平成 25 年度第 2 回全埋協近畿地区コンピュータ等研究委員会	26.03.12	主催：（公財）長岡京市埋蔵文化財センター
「関西考古学の日 2013」スタンプラリー	25.09.01-11.30	主催：「関西・考古学の日」実行委員会（全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック）

文化財建造物関係

平成 25 年度重要文化財建造物保存修理事業等監督者会議	25.04.15	主催：文化庁
平成 25 年度文化財建造物保存事業幹部技術者研修会	25.04.16	主催：（公財）文化財建造物保存技術協会
平成 25 年度登録有形文化財建造物修理関係者等講習会	25.07.25-26	主催：文化庁
平成 25 年度文化財建造物保存事業中堅技術者研修会	25.09.24-27、11.11-14	主催：（公財）文化財建造物保存技術協会
平成 25 年度文化財建造物保存修理関係者等連絡協議会	25.10.15	主催：文化庁
平成 25 年度文化財建造物保存事業主任技術者研修会	25.10.16-17	主催：（公財）文化財建造物保存技術協会
平成 25 年度文化財担当者専門研修「古代・中近世瓦調査過程」	25.10.28-11.01	主催：（独行）国立文化財機構　奈良文化財研究所
第 35 回文化財虫菌害防除作業に関する講習会	26.03.05-06	主催：（公財）文化財虫菌害研究所

委員委嘱

村田　　弘	紀の川市文化財保護審議委員	25.04.01-26.03.31
村田　　弘	名手本陣保存整備委員会委員	25.04.01-26.03.31
川崎　雅史	御坊市文化財保護審議委員	25.04.01-26.03.31
川崎　雅史	みなべ町文化財保護審議委員	25.04.01-26.03.31
丹野　　拓	一般財団法人和歌山県文化財研究会那賀支部理事	25.04.01-26.03.31
結城　啓司	金剛峯寺境内（奥院地区）大名墓総合調査委員会	25.05.01-26.03.31
小田誠太郎	田辺市立美術館協議会・作品選定委員会	25.11.11

Ⅲ　講師派遣・執筆など

講師派遣等

埋蔵文化財関係

村田　弘・丹野　拓「出前授業」	25.05.31	和歌山市立川永小学校
渋谷　高秀「和歌山の文化財ー世界遺産拡大登録を中心としてー」第1回高野山大学図書館戸田文化講座	25.06.17	高野山大学
寺西　朗平「あがらのとこに弥生人がおったって」田ノ口遺跡についての講演会	25.07.06	芝生会館（白浜町）
川崎　雅史「考古学からみる田辺城下町」『第 56 回　1617 会　和歌山・田辺例会』	25.07.27	田辺市文化交流センター
川崎　雅史「立野遺跡の発掘調査」平成 25 年度夏期企画展「木の考古学」	25.08.10	和歌山県立紀伊風土記の丘
川崎　雅史「小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡の発掘調査と御坊市の歴史」	25.09.05	湯川中学校
丹野　　拓「紀伊地域の首長墓系譜について」関西考古学の日記念講演会『ヤマト王権と地域首長』	25.10.12	長岡京市中央公民会
川崎　雅史「和歌山県文化財センター川崎雅史氏による湯川氏館跡の講義」		
「湯川氏館跡の遺跡発掘現場のフィールドワーク」	25.10.16	小松原Ⅱ遺跡（御坊市）
村田　　弘「根来寺坊院跡の発掘調査」那賀地方社会科教育研究会中学部会講演会	25.12.04	岩出中学校、根来寺
川崎　雅史「小松原遺跡と湯川氏」湯川町歴史講座	26.01.18	湯川公民館（御坊市）

文化財建造物関係

多井　忠嗣　平成 25 年度文化財建造物保存事業技術者養成教育第 5 回	25.06.07	於：和歌山県内
小田誠太郎「和歌山県の世界遺産」京都橘大学「地域文化行政論」特別講演会	25.06.11	於：京都橘大学(京都市)
多井　忠嗣「技術の伝承 - 本物を求めて -」文化財修理技術保存連盟第 2 回全国研修大会		
パネルディスカッション	25.07.06-07	於：ルビノ京都堀川(京都市)
多井　忠嗣・結城　啓司　平成２５年度「見て知る伝統技術」	25.08.25	於：丹生都比売神社
結城　啓司「天野丹生都比売神社本殿平成のご造替について」第 3 回高野山大学図書館戸田文化講座		
	25.10.10	於：高野山大学
多井　忠嗣「伝統的建造物の構法と技法」ヘリテージマネージャー講習会	25.10.12	於：和歌山県建築士会館
多井　忠嗣「文化財建造物の修復」ヘリテージマネージャー講習会	25.12.14	於：和歌山県建築士会館
多井　忠嗣・下津 健太朗「重要文化財修理現場の視察と演習」ヘリテージマネージャー講習会	26.02.01	於：琴ノ浦温山荘園
多井　忠嗣「重要文化財金剛三昧院客殿及び台所 - 高野山における客殿建築の特徴」『木の建築 36』	25.07	
多井　忠嗣「重要文化財雨錫寺阿弥陀堂 - 茅葺屋根の腐朽防止対策について -」『文建協通信 NO.114』	25.10	

Ⅳ　刊行図書・出版物等

年報

『公益財団法人和歌山県文化財センター年報 2012』　25.06.04 発行

埋蔵文化財課関係

調査報告書

『六十谷遺跡ー都市計画道路西脇山口線（園部・六十谷）道路改良事業に伴う発掘調査報告書ー』　25.09.04 発行

『立野遺跡ー近畿自動車道松原那智勝浦線すさみ西インターチェンジ（仮称）事業に伴う発掘調査報告書ー』　26.03.19 発行

『神前遺跡ー和歌山橋本線道路改良工事に伴う発掘調査報告書ー』　26.03.25 発行

現地説明会資料

「和田遺跡」現地公開資料	25.08.24 発行
「小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡」現地説明会	25.08.31 発行
「平井・平井Ⅱ遺跡（第 3 次）」現地公開資料	25.12.21 発行
「和歌山城跡」現地説明会資料	25.12.07 発行
「平井・平井Ⅱ遺跡（第 3 次）」現地説明会資料	26.02.23 発行
「東渋田遺跡」現地説明会資料	25.09.21 発行

報告会・シンポジウム資料

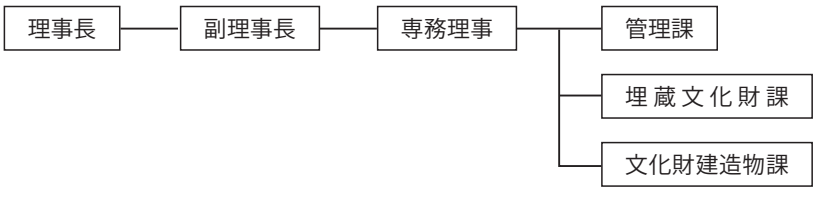
『地宝のひびきー和歌山県内文化財調査報告会ー』資料集	25.09.01 発行
『歩いて知るきのくに歴史探訪〜竈山神社と周辺の遺跡をめぐる〜』古地図で歩く竈山神社周辺文化財マップ	25.10.26 発行
公開シンポジウム『紀ノ川北岸の古墳文化ー初期須恵器・埴輪・陶棺からみた地域の歴史ー』資料集	26.02.01 発行

埋蔵文化財と文化財建造物のミニ情報誌　（公財）和歌山県文化財センター通信『風車』

第 63 号　特集「平井Ⅱ遺跡の発掘調査」	25.07.18 発行
第 64 号　特集「和田遺跡の第 2 次発掘調査」	25.11.08 発行
第 65 号　特集「重要文化財丹生都比売神社本殿保存修理工事ー塗装工事における新発見ー」	26.01.31 発行
第 66 号　特集「小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡発掘調査」	26.03.31 発行

Ⅴ　組織

組織図



役員（理事）

理 事 長	森　郁夫	帝塚山大学　名誉教授　（〜 25.05.30）
理 事 長	工楽　善通	大阪府立狭山池博物館　館長　（25.06.25 〜）
副理事長	西下　博通	和歌山県教育委員会　教育長
専務理事	里森　修	元和歌山県農林水産部水産局　局長
理　事	工楽　善通	大阪府立狭山池博物館　館長　（〜 25.06.24）
理　事	櫻井　敏雄	元近畿大学　教授
理　事	鈴木　嘉吉	元奈良国立文化財研究所　所長
理　事	西川　秀紀	宗教法人東照宮　代表役員
理　事	林　宏	一般社団法人和歌山県文化財研究会　会長
理　事	前田　孝道	宗教法人護国院（紀三井寺）　代表役員
理　事	水田　義一	和歌山県立紀伊風土記の丘　館長

役員（監事）

風神　正典	税理士・風神会計事務所　代表
喜多　英夫	和歌山県教育庁生涯学習局　局長

評議員

井藤　徹	日本民家集落博物館　館長
小野　俊成	宗教法人道成寺　代表役員

加藤　容子　　元和歌山県教育委員会　教育委員
佐々木公平　　宗教法人広八幡神社　代表役員
千森　督子　　和歌山信愛女子短期大学　教授
川端　真理　　和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課　課長
中野　一三　　和歌山県立紀伊風土記の丘　副館長
府中　恵里　　和歌山県立博物館　副館長　（～ 25.06.24）
鈴木　晴久　　和歌山県立博物館　副館長　（25.06.25 ～）
山陰加春夫　　高野山大学　名誉教授
和田　晴吾　　立命館大学　名誉教授

職員

事務局長

勝浦　久和　（～ 25.12.25）

参与

村田　弘

管理課

主　　査　　松尾　克人
副　主　査　　出口　由香子

埋蔵文化財課

課　　長　　井石　好裕
課長　補佐　　土井　孝之
主　　任　　佐伯　和也
主　　査　　中村　淳磯（派遣元：公益財団法人大阪府文化財センター）
主　　査　　丹野　拓
主　　査　　髙橋　智也
副　主　査　　渋谷　高秀
技　　師　　山本　光俊
任期付職員　　川崎　雅史
任期付職員　　寺西　朗平
任期付職員　　津村　かおり
専門調査員　　森原　聖
専門調査員　　山野　晃司

文化財建造物課

課長　心得　　多井　忠嗣
副　主　査　　下津　健太朗
副　主　査　　小田　誠太郎
技　　師　　結城　啓司
技術補佐員　　田村　收子
技術補佐員　　松井　美香（25.11.01 ～）

表紙図案

表紙右上　和歌山城跡出土　陶器製ミニチュア人形（犬）
表紙左下　重要文化財琴ノ浦温山荘浜座敷　東立面図（復原）

公益財団法人
和歌山県文化財センター年報

2013

2014 年 5月 30 日

【発行】
公益財団法人 和歌山県文化財センター
〒 640-8404　和歌山市湊 571-1
TEL 073-433-3843
FAX 073-425-4595
URL：http://www.wabunse.or.jp/
E-mail：maizou-1@wabunse.or.jp

【印刷】
株式会社　協　和

（公財）和歌山県文化財センター
http://www.wabunse.or.jp